

戦骨未だ枯れ盡さず、創痕未だ癒え了らぬだけで歐米何れの國民も乘氣になれないのでなく、クス燻る煙の下に燎原の勢で焼け廣がれない事情の伏在することは否定出来ない。しかし干戈の動かんとする氣運が何處にも絶無でなくして、戦敗に喫した苦杯に不満満腹の國民もあれば、新たに獨立國家を成しても未だ十分の安定に達しないものもあつて、政治的及び經濟的に桎梏に苦しみつゝあるので、世界全人類の理想的平和を樂しみ得る状態が来る前に、不條理なヴェルサイユ條約に定めた國界が整理される爲めに、大なり小なり幾何かの戦争が起らざるを得まいと思はれる。

世界大戦争の勃發は近世國家の極めて巧妙なる機構が完成されたかに見えた時に、或る國家のハチ切れんとする膨脹が均衡を打破せざるを得ぬ結果となつたものである。而して今尙ほ破られた均衡の恢復を見るに至らずして、大小の國家皆それ〴〵惱みを感じつゝある。

ウィルソンの理想とした國際聯盟の成立は弱肉強食の弊を矯めんとして、歐洲では多少の效力を有したるも、戦敗國の苦惱を無視した獨善主義を粉飾した平和主義では永續する筈なく、この實力行使以外の途はすべて塞がれてるのであるから、我が國民が滿洲に於ける權益の擁護に立たざるを得なんだのと趣を一にし、その立場は我が國際聯盟を脱退した時と全く同じである。イタリー對エチオピア紛争は要するに歐洲に禁せられた自由の行動を弗洲で起したと見られる。

古より兵は凶器なりといふが、現代物質文化の進歩によつて戦争に使用される武器は勿論、運搬

通信に利用される器具機械の種類範圍が日一日と多くなり、且つ廣くなつたから、従つて多數軍隊を動員すれば之を支へる經費が莫大で、長期に亘れば補充兵員の品質の低下の外に戦費の累加で戦争の持續に困難を來たし、幸に勝つても獲た所は失つたものを償ふに足らぬことになる。戦後の英佛の如き國家財政の破綻や經濟生活の缺陷に苦しんだのは想像以上で、敗れた側に雙方の經費を負擔する能力がある譯のものでない。現在日本の如く滿蒙に於ける富源を開發する見込があれば格別であるが、行き詰つた財政政策の打開を目的とする開戦は勝敗如何に拘はらず、その國家國民は不幸な結果を招いて自ら縊るが如き難局に陥るべきである。若しイタリーの如きも日本の成功を學ばんとするには鵜の眞似をして、自ら好んで溺る愚に陥らぬ用心が何よりも肝要で、細心の廟算が何よりも肝要であらう。

以上は世界現狀に對して何人も懷抱する意見であるが、我々は此の機會に地理學上から戦争地理學の現在の位置に就いて考へて見るのも閑事ではなからうと思ふのである。

戦争を地理學の見地から考察することは、茫漠として捕捉把握に困難な問題で、太だ難駁なる事項が順々に頭に浮んで來る。然れども戦争そのもの、本性に直接關係あるものと、間接にしか影響せぬものとを區別して見れば、個々の問題の意義も従つて幾分かは明かとなると思ふ。

單に戦争といへば多人数の集團が各武器を執つて闘ひ、一方が屈服して終了する人類の活動と看做してよい。即ち兩集團が各主張する利益があつて相妥協し得ぬ結果最後の手段として戦争に訴へて相手を屈服せしむるものである。文化階段の低位に在る部落間には何時の世にも行はれてゐる此の程度の争闘は地理學的意義は皆無か又は極めて小さいから問題にならぬ。一國內に起る叛亂は政治上から生じて革命となり、或は信仰の相違から起る場合などで規模の大なるものは我々の對象とすべきものもあるが、歴史上には大に意義あるのみで現在の問題とするに足らぬのである。兩國家又は對立した多數國家の間に起る戦争の場合が最も考察の價値が大で、戦争地理學の最も重要な對象となる譯である。

即ち我々の茲に戦争といふのは兩國家の主張が外交上の妥協の途がなくして武力解決に出づる行動を指すもので、その一方又は雙方が二國以上であり得る。時として政治上從來の從屬關係を脱離して獨立し、又は獨立せんとする新國家の舊宗主國との間にも起り得るが、一般の戦争を論ずるに當り此の如き戦争も亦た宗教戦争などと共に特殊の範疇に屬するとして之を除外して差支ないと考へられる。

戦争は此の如く兩交戰國の主張の何れか、戰勝によつて確保される結果を見るのであるから、勝負が決定するのを原則とする。戰闘の繼續により其處まで行詰まる前に講和して無勝負に終るとしても、戰場に於て優越を示した方が比較的に主張を有利に解決し得る。交戰國に對して第三者たる中立國が兩者の間に割り込み、却つて漁夫の利を占める様な火事場泥棒的行爲が行はれるならば戰勝國は勞して效なき不利を餘儀なくされるが、此の如き場合には解決されなかつた争點が後に残り、電氣現象の剩餘放電に比すべき次の戦争の原因を醸すのである。日清戦争後に屈伏した支那に加擔した中立國は三國干渉により我が要求中の遼東半島の占領を撤回せしめて、自ら代つて支那領土内に足場を獲得したるは第十九世紀末の世界外交史上の罪惡で、日露・日獨兩戦争の種は此の時に蒔かれた。ヴェルサイユ條約締結の時にも再び類似の不公平が行はれて、東亞問題の正當な解決に達せずして、徒らに紛糾を奇貨とする不純な歐米外交の結晶が最近の東亞の天を曇らしたのも同一轍である。中立國の目前の利害によつて行動することが世界の理想的平和に對する妨害で、我々日本國民たるものは公明正大なる政策を執り千萬人と雖も我行かんと態度に出る平素の覺悟で、瀾亂紛争の非常時を突破すべきではあるまいか。

之を要するに戦争は外交の續きで戰闘行爲が或る段取りまで進めば再び外交に戻る。換言すれば斷絶した國交が恢復されて兩國民間の通商交通が常態になる。中立國の干渉が行はれぬ限り敗者は

勝者の意志に屈伏せざるを得ぬから、勝者の主張する權益及び戦費の賠償を要求され、領土の割譲を餘儀なくされるのは避けられない結末である。

極端なる場合には敗者の全領土が勝者に占領されて仕舞ふことも可能であるから、前者は滅亡して後者が之を收得するに至る。歴史上の亡國は多くは此の成行で、異民族又は異國家に併呑され、之を克服戦と呼んで區別し得るが、近世歐洲の如き勢力の匹敵した國家の列峙する状態では、ポーランド國の隣國聯合の武力による分割を除いては獨立國家が突然此の如くにして消失することは殆んど稀である。普佛戦争では佛國全土が占領され、ヴォージュ、ジュラ間のベルフォール山門の要塞が残され孤壘となつたといふ完全に勝敗の決定した場合にすら、接壤のアルサス、ロルレーヌ地帯の割譲と償金とによつて講和した。以上述べ來つた所を概括すれば、戦争は國家領土の伸縮得喪を來す點で政治地理學上に重大なる意義を有するものである。

茲に於てか國家は自體の存續上外來の武力による襲撃侵略に對する防禦が政治機關の缺くべからざる一要部となるのは當然で、陸上國境を掩護する要塞や海岸を警備する砲臺はその常設機關であり、常備の陸軍及び海軍が平時に於て完具してゐねば國民が堵に安んずるを得ない。此の國土の防禦即ち國防は如何なる外交政策でも防止し難い所を喰ひ止める最後の線である。のみならずして消極的な守勢の施設のみでは眞の防禦の意義を發揮し得ないものがあつて、積極的な攻勢に出る準備がなければ目的が達せられない。故に國家百年の長策は此の兩面から講究さるべきである。

三

突發する戦争に對する國防の大方針は二つに別つて考察さるべきで、一は國家自體、一は假想敵國と數へねばならぬ隣接國家との關係が直接の問題となる。陸地が國境の大部分を占める大陸内の諸國では兩者共に比較的に簡單である。之に反して大部分海岸である日英兩國では之と大に趣を異にし、蒙古や西國アルマダの襲來の如き歴史上大事變が起つて乾坤一擲の決戦が國運を支配することになる。日露戦役に於ける對馬海峡の殲滅的捷利がなかつたならば我が國土の安全感は現在の如く牢平たるを得なんだ譯である。然れども四面環海の兩國は過去に於て大陸に於ける戦塵を被ることは少なかつたとはいへ、大陸邊縁海に位置して海上交通の便益を樂しみ得る一面には、シーザー、ナポレオン、成吉思汗、忽必烈汗等の克服戦争が對岸に起ればその煽りを喰ふ危険からは脱却し得ない。露國の勢力が半島に波及し來らんとした時及び獨軍がフランダース海岸を席卷して佛國に闖入せんとした時に、兩國が驟起して對岸大陸の野戦に屍を晒すも辭せざる臍を固める必要があつたのは、地勢の關係上默過し得なんだ譯である。

海國に於ける陸軍は此の意味で同じく十分の常備兵を有するを要し、若し英國にして我が陸軍に

比すべき有力なもので、敏活に出動することを得たならば、白國の永世中立を無視した獨軍右翼の大旋回運動を阻止して、北佛に侵入する出鼻を挫くことも不可能ではなかつたと想はれる。又た獨軍首腦部で此の如き強力な敵國軍の参加を打算せねばならぬならば、或は白國中立の尊重を餘儀なくされて、リュクサンブール以東の國境を越え、モルトケの成功した方面から佛國侵入を試み、その戦禍の範圍は大に局限されたかも知れず、又た内線の位置を利用した作戦を先後して、西面の攻勢を後にして先づ露國に一大打撃を加へることにしたかも知れなかつた。

更に又た西部の戦争が迅速に片付け難く、東部も亦た容易に決戦が出来ないと見たらば、無謀なる開戦を敢てせずして、戦争はバルカン半島に局限されたかも知れない。此の如き次第であつたので英國陸軍の存在が無視されなかつたならば、世界大戦争は序幕から頗る異つた場面を呈したと想像される。要するに英佛協商を眼中に置かぬカイゼルの暴舉は英國陸軍の参加による權衡一端の重量を見積らなかつた爲で、結局英佛協商による戦争防止の目的が無効に歸したのである。

内陸國の防備は領土の面積と輪廓の形状、界線の延長と地形等の自然地理的性質が極めて重要な關係を有することは勿論である。就中高峻なる分水界山脈及び徒渉不能の大河川は國境防備に大に役立ち、山嶽地帯の存在は現今航空機による空中襲撃の行はれる時代に入つても防禦を容易ならしめ、内陸國境に頗る重大なる意義が認められる。

此の如き防禦に便なる地物、特に山嶽の凸地を缺いた平坦なる地勢の土地が領土の大部分を占める國家に在つては國防は全く有力な陸軍の保護に依る外なく、優勢の兵力で野戦する爲めに常備軍の兵員は地物の掩護ある國に比して高率なるべきは明かである。瑞士を除いた歐洲小國が隣接大國の反目により岌々たる存立を續ける状態に置かれてゐるのは自然地理的制約に起因してゐる。

此の如く戦闘員數の多少が内陸國の國防の基本的重要性を有するから、領土の廣狹と共に人口の疎密が並び考へられねばならぬのである。故に高峻なる山嶽が峙立し、廣濶なる平地が展開したる或る大さの地域があつて、初めて國家が永續性を持つのであつて、之を缺けば弱肉強食の生存競争に耐へ得ない。歐洲小國が國際聯盟に關心を最も多く持つ理由は此に在つて、大小國家の列峙する歐洲現状を維持する上に至大の關係がある譯である。

然らば此の如く朝に生れ暮に死する蜉蝣に等しい一時的國家か如何して成立し得たかとの疑問が起らぬでもないが、これは歐洲では羅馬帝國の西北國境内外に個々の民族から成る部落の大小集團を成してゐたのが、その崩解に當りゲルマニア民族の有力な一大國となり、シャルルマーニュ殞落後に佛國その他の諸國となり、その東には羅馬植民地の諸民族及び之に接續するスラブ民族等の部落も亦た各一小國を建てたのである。此等の中世に興つたものは日本の鎌倉室町兩幕府の下に出来た大小名の戰國時代に入つて全く中央の統制から獨立したのや、周室の權力が微弱となつて春秋十

二列國、戰國七國の對峙となつたのと類似の變遷發達の徑路を取つて出來たのである。その中最も久しく此の形態の續いたのは獨逸聯邦で、ビスマルクが出た後にも並び大名の様にザクセン、バイエルン以下の大小國が雜然と含まれて近日に及んでゐる。東歐及び中歐に於ける現在の列國對峙は此の複雑極まる歴史が生んだので、民族・言語・宗教の相異も亦た之に織り込まれて、四海一家の理想的平和生活が望ましくして達せられない深い禍根は此處に伏在してゐるのである。

是に由つて觀れば國防問題は自然地理的因子と共に人文地理的又は歴史地理的因子が錯雜してゐるから、地勢上から聯合協力を要するに拘らず、却つて反目嫉視して蝸牛角上の鬭争を續けるバルカン半島の如き状態のあるのは怪しむに足らぬ。故に人文地理的因子を考慮に入れて國々の國防計畫を検討せねばならぬ譯で、國土の面積・人口・境界線長のみから割り出した一般的軍費縮小案が建てられるものでないのは勿論である。

尙ほ之に附加へねばならぬは、前に一言した國防は消極的の防禦と共に積極的な攻勢防禦に依らねば眞の意義目的が達せられぬことである。小國には後者が實現出來ない。人的にも物的にも之に要する實力がない。唯聯合即ち完全な攻守同盟の力に仗る外ない。バルカン諸國の共通の利益に就いて十分の了解認識が出來て此處まで漕ぎ付けて初めて達せらるべく、東歐に醗酵する戰雲も一掃される。國防費負擔の重荷に喘ぐ中歐の大小國も同様で、共濟共存共榮の大方針なしに徒に高調す

る國際聯盟の使命が口頭禪たるに止まる現状は要するに猜疑嫉妬の却つて日一日深まるが爲めの成行きである。我々國民間に唱へられる皇道主義からは此の如き禍根を絶たねば同じく眞意義を發揮する日が見られぬ。我が國防政策の基礎が此の主義を擴充した皇道主義に立脚して攻勢防禦の實行をも行使すべきである。霸道權化の心境から出たナポレオンの克服戰や、カイセルの殲滅戰に演じた如き兇器を振舞はして人を傷け自らも傷いた悲劇に鑑みて攻勢防禦の眞諦を誤認してはならぬ。戰爭の國家に對して有する關係は以上述べた所の外尙ほ種々の角度から考察すれば、夫々興味ある問題となるが、今茲では國家存立と離れ難い關係ある國土を保全する國防を眼目として詮じ來たのである。従つて是は靜的に國家といふ立場から觀た所に限られてゐる。領土の得喪、國家の存亡といふ人類の政治地理學的生活の一面に關する問題に限られてゐる。

四

他の一面から戰爭といふ現象の内容に立入つて國民生活に如何なる關係を有し、物及び人が如何に活用され活動するかを考察するのも問題の一つである。即ち歐洲近世に常備軍 *Standing army* が國家樞要の機關となる前には、封建時代の日本と同じく、戰闘員は國民中の一階級として存在し、日本の士農工商の區別と同じく、武士だけが隸屬する從卒を引率して戰場に出るのであつた。騎士

が主で歩卒は従となつた集團の間に行はれた當時の戦闘は、一番鎗の功名を競ふ勇士の奮闘で陣を陥れる點も亦た東西共通であつた。常備軍の出現と銃砲の使用も相前後して流行することゝなつて、次第に砲列を布き散兵線を張つた陣地戦に進化し一騎打ちの効果が減少した。此の過渡期に於ける戦闘の實況は第十七世紀の騎士的の波蘭國民の武勳を描寫したヘンリック・シエンキエウイチの「劍火録」その他の三部作に面影を窺ひ得る。

戰士の集團が俸給を受けて戦ふ傭兵 Mercenary といふ職業的軍隊の出現も亦た此の時期に特異なる所産で、第十四・五世紀のイタリーでは懦弱な都市壯兵に代用され、その中からミラノ公國を贏ち得たスフォルツァ父子の如き成功者が出てゐる。然れども傭兵は報酬次第で兩敵國の何れにも靡くのであるから、今日の敵兵は明日の戦友となる。従つて本氣で身命を賭して闘ふ筈はなく、半日程も鎗を削り火花を散らす激戦を経て、而かも雙方に一人の死者を出さなんだといふ劍劇そのまゝの場面を演じたといふ話は誇張でなかつたらしい。伊國が羅馬帝國土崩瓦解の後、内に闘ぐのみで外敵を逐斥する氣力なく、熱血男兒ガリバルディーが呼號して素朴農民を驅つて統一を圖るまで隣接諸國の間に頭の上らなんだのは傭兵制度 Condottieri の發源地たる國民なることを想へば怪しむに足らぬ。

之に類似した武將の行動が伊國と共に古い文化を誇る支那に認められるのは怪しむに足らぬ所で、秦帝國の瓦解を促した蜂起の諸將の中に同様の氣分が見られ、趙の名將と言はれた廉頗すら趙を見捨て、魏楚に轉仕した時代に近いから當然かも知れぬ。秦將章邯等が項羽に降つて三秦王となつたり、韓信彭越が齊楚の王に封せられる約束を得るまで高祖の軍に垓下に會せなんだのに此の傭兵の首將たる氣分が濃厚であつた。此の如き人物の面目の躍然たるは大文豪シラーに描出されたワレンスタインの悲劇で瑞典王グスタフ・アドルフと乾坤一擲の大活劇を演じて間もなく、皇帝と瑞王との間で漁父の利を占めんとして、終に刺客の手に斃れた。是が歐洲傭兵首將の最後の大立物で、太閤記十段目に描出された本朝叛將傳中の傑物明智光秀に比較して、霸道の行はれた時代の空氣の何處でも大同小異なるは驚くに足るものがある。

國防に必要な兵員を全國民中から選抜して徵集する常備兵の組織が成立しても、自覺した國民の起つて戈を操るといふ精神の行渡つたのはナポレオン戦争以後の歐洲まで降り、一八七〇年の普佛戦争の頃に初めて戦争の目的を認識して闘ふ氣分が興つたらしい。此の戦争に参加した身分證書を有する一老兵が一九〇〇年萬國博覽會の日本部陳列品番人に雇はれてゐて、その敗因は士官の懦弱であつて、爲めに我々兵卒の奮闘が無効であつたと憤慨し、次の戦争に目に物を見せると傲語してゐた。實際一八七〇年の戦役は不用意で傲慢なナポレオン三世とその側近者が巧にビスマルクに釣り込まれて何の準備もなしにクルップ砲の猛射に士卒を晒したと言ひ得べく、世界大戦争の時の佛

軍の士氣旺盛で、マルヌ戦線を固守して攻勢に轉じたので、老兵の語の我々を欺かざるを知るに足るのである。

此の老兵の懷舊談を聞いて憶ひ出されるのはエルクマン、シャトリアン共著の「一八一三年の徵集兵」で、之に描かれた跛足の青年は狩り出されてライプチヒ戦に参加し、終にワールローにも出陣して、敗走の時に脱して郷里に歸るといふ戦時の實況で、その間に非常時の意識の有無が闘志に重大の關係あることが看取される。國防の要諦は國民全部の護國精神の徹底で、之なしに目的が達せられない。國防上に最良の武器は此の精神で、醜惡暴虐の政治に喘ぐ國民に徒らに排外思想を鼓吹して、之に仗つて外敵に當らんとする様な霸道中の最も悪い國策で眞に此精神を發揮せんとするのには木に縁つて魚を求めの愚である。上に擧げた小説中のグルダン老人の目に映じた佛國なども此の意味から非常に面白い教訓になるものである。

之を要するに國家危急存亡の秋に一致團結して外敵に當る國民の敵愾心は一朝一夕に養成されるものではない。故に戦争に對して考察するには國家の歴史的基礎を人文的因子の第一として算へねばならぬ。

此の問題は一國を組成する人民が同種の民族であるか否かに依存する。従つて人種學的及び民族的の種々の要素は無視され難いが、體質上頗る異つた古く溯れば血統の異つた住民と雖も、永い間に言語・風俗・習慣・傳説が全く一つになれば同種の民族として混一される。文化民族の箇々の成立は要するに同化作用が完全に行はれた結果に外ならぬ。而して此の作用は環境に支配され、自然地理上の地區間の交通が續繼する時間と頻繁の度合とによつて支配される。前に述べた如き一大國の出來上るには此等の條件が都合よく具備してゐるを要する。急速に併合されて歴大な國となつた場合には寄木細工の如き異民族の集團である爲めに團結力に乏しく、瑞西の如く自然地理上の地區として隣接國に對する特殊の性質が強く働いて、佛獨伊三國語を話す住民が一國家を組成してゐるのは例外の例である。

五

國家の環境は此の如く人的要素から考へる外に物的要素から之を観ることが同じく大切な問題である。之を證し詰めれば國民の執る武器と糧食被服の供給がそれで、更に之に攻防に重大なる役割を演ずる山河・森林・不毛の原野等の地物も加へて考へねばならぬが、後者は戰略地理學の問題であるから、我々が茲に戦争を一般的に論ずるに當つては姑く措いて言及せぬ。

戦争に使用される武器は原始的文化の民族では狩獵生活の生業に缺くべからざる槍劍弓矢とその貫通を防止する盾の類とであつて、その穂先や鏃が石器から銅鐵に進歩したのが我々の文化階段を

區別する目安になつてゐる。石器の中で鋭利に加工し易い黒曜石が東西の石器時代民族に着目利用されたのは當然で、此の火山岩の産地に近い諏訪湖底に多量の石器が発見され、我々は此處に石器時代の備前長船、濃州關又は獨國エッセン、佛國クルーズーに比すべき武器の供給地があつたと考へた。古事紀に建御名方命が出雲から此處まで逃げて來たといふ傳説が残つてゐるのは、日本原住民の間には石器時代から續いた西國との交通が行はれ、武器需給の關係が大に之に與つて力あつたことを察するに足るのである。同じ様な地位は地中海東部のエゲア文化世界にサントリン火山諸島が之を占め、英國考古學者エブ・フランスは此處を石器時代のシニフィールドと呼んだのは面白い暗合である。

氷河堆石中に雜存する打製品から日本にも古新兩石器時代共に在つたと考へられるが、未だ之を確知せぬし、銅器時代の出品も少數の銅銚位で、先史時代の武器に関する知識は豊富でない。支那では夏殷二代は所謂金石並用時代即ち銅器時代への過渡期から青銅時代に跨り、周代も尙ほ主用武器は青銅で造られ、秦漢以後に鐵の使用が一般に行き渡つた。鐵が最初は銅鑠の莖に用ゐられ、尖端は尙ほ堅い青銅製であつたものが出土品に認められてゐる。西洋に於ける青銅武器の使用はエゲア文化の最後の隆盛期を代表し、フェネシア人の錫石の鑛山を探したのは錫が青銅武器に必要な合金成分であつたからで、武器製造業の進歩の過程を語るものである。

鍛錬による鐵の硬化法は古代に於ける戰鬪の仕方到大革命を起したことは言ふまでもなく、堅牢な甲冑が出来れば之を貫く槍や之を割る鉞などが馬上の戰鬪に用ゐられ、中世の戰爭を描いた十字軍の勇士の繪畫文學等に當時の戰況が窺はれる。支那に於ける戰鬪を畫いた後漢の畫像石には、直劍と共に稀に曲刀が見え、銅鐵過渡期の光景が知られ、又た漢代の馬種は武帝の西域から種馬を輸入して大に改良されたのも圖様に徴して明かである。

支那の鐵に関する文獻の最も古いのは穆天子傳の鐵山を祭つた記事で、其の山下の劓閭氏の部落は鐵鍛冶らしい。武王が牧野で殷紂王の兵を敗つて鹿臺に登り、輕呂といふ劍を以て之を撃つたといふが、輕呂即ち劓閭で、漢代の匈奴人の用ゐた徑路刀も亦た同じいと考へられる。常陸風土記に崇神天皇の香島宮奉幣品目中に許呂四口が大刀十口と別になつてゐるのも亦た恐らくは短劍又は刀子の類で、古いこの名稱が日本にも行はれたらしい。

然れども支那内地に於ける製鐵工業は齊國管仲の經濟政策の一部として起つたもので、戰國以後に降つて蜀の卓氏・南陽の宛孔氏などの如き鐵成金が出来る位に盛大となり、漢書地理志に鐵官を置いた縣名が載せてある。武器として鐵を鍛ふに至つたのも秦漢帝國以後に屬すると想はれる。但し武器製造に関する史料は甚だ乏しく、三國魏志に後漢末曹操即ち魏太祖が丞相の時に韓暨が擢用されて監冶謁者となり水車で動かす轆を作り、在職七年間に器用が充實したといひ、その功により

司徒の顯職に陞つた一事を見るのみで、魏が河南の南陽地方の鐵鑛から武器製造を盛んに行ひ、武力統一の實績を挙げたと考へ得るのである。

後漢末の兵馬倥傯の時期に鍛刀の技術の進歩もあつた。文帝(魏)が造らせた百襲刀なるものは折り返して鍛鍊したもので、此の鋭利な刀劍を造る方法の詳細は北史及び魏書の慕容懷文列傳に見え、日本刀劍家の間で肌物と稱するものは此の百襲刀の特色を保持してゐると信せられる。

同じく三國魏志東夷傳に據れば三韓の弁辰が鐵の産地で、日本も此處から供給を受けたといふ。三韓から道佛混淆の妙見信仰を傳へて來た太良氏の歸化は或は鐵鍛冶も亦た半島から九州北部に來た徑路を語るものらしい。太宰府が置かれた後に筑紫鍛冶の隆盛は想像に難くなく、鎌倉末期の左一派の刀工に先つて古い名工があるのも當然で、平安朝初期以來定秀・行平等の名が出てゐる。その起原は或は奈良朝以前に溯るべきであらう。海外の鐵原料を仰ぐ製鐵工業が四十年前に再び此の地方に起つて煤烟天を蔽ふ活氣を呈すに先つこと千數百年既に同じ工業が此の邊に榮えたことが認められるとすれば、地理的位置の關係が此の如き歴史の繰り返される裏面に現存するのは見遁がせぬ。

日本古代の鍛刀工業の歴史を考ふるに當つて奥羽地方の鐵鑛と關聯した月山と舞草^{マクサ}の兩地の古刀工が我々の注意を惹くのである。舞草は北上川の左岸即ち平泉の對岸に在つて北上高原の花崗岩と

古生層の接觸帶に胚胎した鐵鑛産地を流れる砂鐵川を背にし、原料の供給に便な處に起つて、平泉の奥州文化の榮えた頃まで續いた。出羽國月山に筑前の彦山に比較すべき古い修現道の起つた時に先づ刀工が出て、便利の需給地に遷つた形跡がある。月山の綾杉肌と稱する鍛ひ方は下作と鑿盛されてゐるが、ズット古いものには稀に流水紋肌と呼んで區別したいものがあつて、西亞の名劍に對する感を催すのである。此の作風から轉化した舞草鍛冶の中から大和友光や文壽實次が大和朝廷に召し出されたのである。頼朝の鎌倉幕府を開いた時に先づ來たのは貞國又は眞國で最初の鬼丸は北條時政の爲めに眞國が造つたもので、時頼の時に更に栗田口國綱に命じて模造させたのが現存の名刀鬼丸であるらしい。鎌倉鍛冶系圖には備前國宗から正宗一派が出たとするものよりも、眞國を元祖とした系圖の方が古い傳承らしい。開府當時刀劍の需要が盛んで舞草名工が呼び寄せられたのは當然で、武家の好尚に合致する華美な作風を此の一派が傳へたとする方が、姿も煮え匂ひも全く趣を異にする備前系のみから出たとするより遙かに合理的の解釋である。

此の他に常陸風土記に、佐備大麻呂といふ鍛冶が香島神宮に近い若松浦の砂鐵を採つて作つた劍が大に利なりしも、神山で採ることが出來ぬといひ、北日本に刀劍に要する鐵鑛は乏しくなかつたのは明かである。バチェラー氏アイヌ語辭典によればエムシ・ムツと二語を連ねて刀を佩くと對譯され、國史・國語の學者間に異説はあるが、蝦夷といひ陸奥といふ語が、此のアイヌ語から出たと

するに疑を容れる餘地はない。此等は劍を佩ふる部族の住む處を呼んだもので、漢字の様な輕侮した意味は毫もなく、毛人・東人・蝦夷と中央文化世界に言はれても、その武勇は争はれぬから、蝦夷・毛人・東人等を名乗りに用ゐる朝廷高官があつた譯である。此の銳利な武器を持つた勇士の活動が武家政治の出現を促したのであるから、我が文化史上に北日本特に奥羽地方の鐵鑛産出に伴ふ武器製造業の意義が頗る重大である。

平安朝初期以後の中國に刀工の輩出したのは山陰の砂鐵に密接の關係あるらしく、その交通路に當る播磨國府に近い小川にゐた安家安頼の兩工が最も古く、次に伯耆の産地に安綱が出で、更に降つて備前が鍛刀工業の中心地となつて友成以下の名工續出し、最大の發展を過ぎたものらしい。

東國即ち關東以北の地は蝦夷人及び安倍氏等の如き俘囚又は歸化人の跳梁後に押領使その他の豪族の割據となつて鎌倉時代に入る間に内亂もあり小競り合もあつたのと同じく、王朝の西國も海賊が跋扈し、豪族の割據もあつたから、王朝以來戰鬪は頻々行はれ、備前鍛冶の武器の需要は間斷なくあつた譯で、室町幕府時代には倭寇と貿易で需要が倍々大となり、末備前の數打物カヌと稱する濫造品が輸出された。九州の浪ノ平は九州の南端にあつて、之を廻航する南支那の交通路に當つてゐたので同じく大に榮えたらしく、浪ノ平の名が源平時代の戰士の用ゐた利器に數へられたので、平安朝末に於ける重要な武器供給地であつたことが知られる。武器の製作が最も晚く興つたのは美濃で、

鎌倉時代以後に始まつて戰國時代に最も隆盛を極めた。而してその地理的素因は鎌倉に通ずる中山道の要路に當るからで、保元年間に青墓長者に頼まれて源氏重代髭切丸を模造した外藤が最も古い名工とされてゐるので此の事情は明かである。降つて織豊兩氏の起る頃に武器供給地として重要となり、當時の新刀なるに拘はらず、關係六兼元・和泉守兼定父子などの業物が名聲を揚げ、明治以後まで鍛冶工業が持續された。

此の如き武器製造の傳統的工業は最新式の銃砲を持つた常備兵の出勤する一百年來の軍備には不十分となつた。佛國クルーズのシュネーデや獨逸エッセンのクルップの如き大規模の武器製造會社は此の必要に應じて、英國の製艦業と並んで勃興し、他の大資本の製造工業と相携へて迅速潤澤の供給が出来るので、歐洲強國をして世界に雄飛せしめたのである。

今や軍需品といへば此等の武器と之に伴ふ彈藥の外に、直接間接に使用さるべき器械器具を首めとし、食糧・被服等に至るまでを含み、有事の日には陸海軍工廠で造る武器類と共に一般の民間工場工場の全能力を傾注する必要がある。故に戦争は半世紀以前と異つて強壯な兵員が武器を執つて戦線に出ると共に、國民の全力を軍資供給と運搬に用ゐるといふ舉國一致の動作となつて來た。是に於てか國防と國民生活との間に離るべからざる聯絡が成立し、國土内の經濟状態の優越が最後の勝局に達する上に至大の意義を持つのである。戰場に於ける勝利が背後に動く國力の充實に依るは古往

今來別に變りはないが、現代では戦争に使用される器械力の性質が複雑となり、平時に於いて何時でも戦時状態に入れる準備 Preparedness がその關鍵になつてゐる。孫子の所謂廟算なるものが一元一次から多元多次の方程式となつて來た譯である。

軍資は此の如く国力の全部に等しいのである。一國が包圍状態に陥つた場合には國民全體が兵糧攻めで脅される危険もある。日露戦役の旅順攻撃に當り日本軍は城内非戦闘員の出城を許した如き寛裕な王者の戦は歐米諸國民には恐らくは宋襄の仁と笑はるべく、間接に敵國を苦しめる方法の何たるを選まず悪用される所の義戦の觀念を缺いた戦争が常態で、内線の戦争に有利な獨塊兩國の位置は終に舉國兵糧攻めとなつて屈服せざるを得ないのであるから、毒瓦斯を戦場に用ゐた非人道的行爲で兩國の無法を責めることが出來ぬ。我が國情は大に之に異り、米と魚が常食で食料を輸入する必要が少い爲め、假りに英米兩國の艦隊の封鎖より海外との交通が杜絶することがあつたとし、ても滅多に此の方面の脅威は起り得ない。國際聯盟脱退を決行した當時或る人は經濟封鎖に次ぐ包圍戦の危険に陥るかとの杞憂を抱いたかも知れなうだが、我々は假令最悪の難局に當面するにしても、兵糧攻めで苦しめられる危険は先づないと信じてゐた。我が輸出貿易が關稅の障壁に包圍されることも、我が工業原料の供給者たる國との間には絶對の通商の斷絶が起り得ないし、如何に資本主義萬能の國と雖も安價生活の必需品の途を閉塞するのは社會問題として國民の全面的賛成を得

る筈がないから、或る程度を超えた輸出入制限の實行も亦た不可能に近い。世界的不景氣が良品廉賣の我が工業を助長する現状は當分如何に妨げんとする政策が外國に行はれても、水の卑きに就く如き此の勢を止め難い譯で、我が國防の基礎となるべき各種の産業は日に月に充實して行きつゝある。故に此の點では我が國民は大に意を強うしてよい。我々の茲に縷述した所を要約すれば、此の信念の下に努力するならば經濟・財政・政治・外交の國策は自ら落着く所がある譯で、非常時を安全に突破する途は坦々たるものではあるまいか。

二、昭和十年の回顧と十一年の展望

昭和十年を送り十一年の春を迎ふるに當り我々地理學徒の懷抱如何。

九年の秋季に南日本に襲來した未曾有の大低氣壓に次いで、十年にも復た暴風雨が近畿より東北までに莫大の損害を與へたるは天災奈何とも爲し難しとする外なかつた。大陸側に在つても河南・河北・山東三省の水害損失三億元以上と稱し、湖北一省の損害は糧食棉花のみで一億五千萬元に達すといひ、又た聞知する所によれば、包頭以西の黄河上流地方でも沃野が溺没してゐるといひ、黄河・揚子江兩大水域全部の損害は想像に餘る慘狀である。是れは東亞氣節風域全部が相踵いで被つた災厄で、此の域内に生息する人類の不幸を如何にすれば輕減緩和し得るかを講究せねばならぬ。

支那國土開發の歴史が后禹の治水傳説に始まるのは大に意味があるのである。我々は天の降した此の災厄に覺醒して東亞の住民が共存共榮の坦途を見出すに非ざれば、同一回苦痛を深酷にし倍々恢復を困難にするに信ずる。

昨を歐亞大陸の東邊から西方に轉ずれば、蝸牛角上の暗闘が激化して、進つて東弗洲の戰禍となり、何時如何に安定の状態に戻るかを逆睹し難き形勢に在る。サラエヴォ暴舉が導火線となつた大戰爭の慘虐が再演されることは、中歐國民の疲憊の現況から推して或は之なかるべしとするも、戰亂は往々にして不安不満に絶望した人心に勃發するのであるから、均衡に些少の破綻が起れば、岌々乎たる平和が何時破れるかを逆睹し難い。

最近の外報はブラジル革命爆發を傳へ來り、國境問題に紛糾の絶えぬ南米洲の天地に別種の性質を有する叛亂が発生したと聞く。その騒動は南部諸州には波及せぬといふも、多數同胞の安住の地を此處に求めつゝある今日決して風馬牛相關せぬものではない。

外を視内に顧みる時我々は内憂を斷ち外患に處するのが國民の試練であるとの覺悟を緩めてはならぬ。

是に於いて我々學徒の使命は何處に在るかと言へば、國內海外を通じての認識を正確にし、精密にするが第一である。歐米諸國民が兎角東亞に對する認識を誤り若くは故意に曲解し勝ちで、國際

關係の正當なる軌道を逸したる暴斷を敢てして、我が國民は苦杯を嘗めさせられ、日清日露兩戰爭以來屢々不利の地位に置かれたのに鑑みて、我々の側からまた誤解に出發した輕躁の行動を執ることとは大に警戒せねばならぬ。又た繰返して言ふが之と同時に正義を守り大道を履み千萬人と雖も敢て行かんとする正しい信念と眞との勇氣を養ふことが至上の方策で、之を外にして護國救世の眞諦あるべしとは覺えぬ。

昭和十年一月（前章）に我々日本國民の將に當面せんとする非常時なるものに對して一言した如く、我が國民の覺悟は環境に對する正しい認識に立脚して、避け得る危険を免れ、避け難い危険を排する努力と犠牲とを惜まぬことであらうと信ずる。而して此の努力たるや唯昭和十年・十一年の兩年で世界の危機が消滅する如き錯覺に支配されて、一時的の興奮であつてはならないのである。歐米諸國が戰後引續いた經濟財政の悲況に呻吟する間に立つて、日本のみが幾分有利の地位を占めて、廉價の良品の多賣により先進諸工業國を凌駕しつゝ、あつた十年までの好況は通商上の包圍政策を刺戟すること倍々大なるべきで、之に對する妨礙が種々の形で出現する筈である。故に十一年を無事に突破した後更に更に大なる危機が續發し得ると先定して之に善處せねばならぬ。

昨年の卷頭に言つた發動機用の燃料自給問題に關しては海軍省が製造方法を公表して憚らぬまでに進歩したとの報導は大に我々の意を強うする所で、自然科学者の苦心努力が國家に貢獻した好例

である。我々斯學に従事する學徒も亦た此等の同僚の後に落ちぬ様に地理學の理論と實用とのあらゆる研究に向つて邁往するに一番の奮勵を要する。

三、太平洋上に於ける日本帝國の位置

我が帝國の主體たる日本群島は弧狀の列島から成り、太平洋に面し東亞大陸を負ひ、兩者の漸移帶を形づくつてゐる。故に現代の文化世界に對して占むる地位を理會せんとするには此の大洋と大陸との地文及び人文上の意義を正當に認識し考慮するを要するは屢々するに及ばぬ所で、我が帝國の地位の優越は殆んど決定的に占居する世界的位置に依存すると言つてもよいのである。

太平洋中に在つて歐亞大陸の東邊縁に密邇する島嶼であるのは、北半球の温帶に横るといふ事實と共に、我が國民の郷土を考へるに當り、先づ牢記さるべきで、四面を圍む海洋を無視して我が領土に立入つて地理的考察を加へることは出來ない。太平洋を對象として論究を試むる意義は茲に在る譯である。

太平洋が最大の水面であるのは、歐亞大陸の最大の陸面であるのと相應して地文上に顯著な對照を呈するに止まらずして、人文上にも種々の錯綜した關係を持ち、その箇々の問題に對して、茲にはその要點だけを綜合約説して見ることにする。

第一は太平洋の面積は約五億一千万方呎の地球表面の中の一億八千万方呎即ち三分一強、約三億六千万方呎の全洋海面の半ばを占め、之を圍繞する歐亞(五千五百萬方呎)・兩米(四千二百萬方呎)・濠洲(九百萬方呎)を合せた陸面の二倍に近い。此の事實は輿地圖を披いて見れば容易に看取される。

周邊を界する海岸線は大きな弧線を描いて北東西の三邊に連互し、南だけ南極大陸との間に廣い海面が隔離するに止り、環太平洋地帯と呼ぶ名稱が行はれるのは當然である。その趨勢を細看するに、陸上の山脈も海中の島嶼も、共に海岸線に並走する傾向が著しく、大陸地塊を縦斷する第二の海面たる大西洋の折線狀の屈曲を呈するのと好對照が認められる。ジウスは兩者を太平洋式と大西洋式とに區別して對立せしめたが、兩者の地質構造上の特性は海溝と火山の分布に明瞭に現はれてゐるのである。

大西洋には小アンチルの北邊に接したポルト・リコ海溝の八千米を超えるに止るに反し、太平洋には日本海溝は一萬米を超え、フィリッピンその他に九千米以上の深部が発見されて、何れも島嶼に並走し、兩米でも同じ趣が認められる。火山も彼に在つては大小アンチル嶋弧の外には孤立したアゾーレス、アイスランド、ヤン・マイエンの如きものに止り、南北兩米からアリューシアン、カムチャツカ、千島列島、フィリッピンを経てマレイ諸島に至る間に大小の火山錐の相望んで噴煙の

絶えぬのと全く比較にならぬ。

次に注意されるのは圍繞する陸塊に間隙があつて、北氷洋、印度洋に自然の通路が開られ、大なる迂回を要する兩米も亦た中間の隘れたパナマ地峽が掘鑿されて運河を通じてゐる事實で、太平洋地域と周邊との海水の循環を助け、又た海上交通にも之を利用して頻繁を加へつゝある。

然れどもパナマとフィリッピンとの間で大海窪の東西の直徑は約一萬六千呎に達し、此の廣大無邊の海面は船舶による運輸に大に役立つも、軍事上の行動は殆んど不可能に近いと想はれる。此の大なる空間は我が島帝國と北米合衆國との間に海戦が行はれる場合に大なる妨害になり、雙方共に守るに易く、攻めるに難いのである。種々の不穩な言論が彼岸に起り、日米間の國交の危機を孕む如き訛傳が傳播するのは、軍備擴張により利益する特殊業者の爲にするに過ぎざるべきは略ぼ推測される。我が四面環海の國土に取つて、艦隊の來襲に對する限りでは此の空間が最も有效な障壁である。此の戰略上の見地から又た此の海面に散布する島嶼の或るものは特殊の重要性が認められ、布哇、グワム、小笠原列島等の洋中の飛石の如きものや、米亞兩洲の間を繋ぐアリーシャンの位置の價値が將來倍々發揮される譯である。

此の廣大なる海洋が氣圈との接觸により氣水兩流動體の相互に及ぼす影響がまた貿易風・氣節風・颱風等の氣象及び氣候上の決定的要因となり、延いては赤道海流を起して海洋を成す海水全體に特殊の循環機能を賦與し、赤道と兩極との間に氣溫及び雨量の差異をある程度まで緩和もし、又た過大にもするのである。我が群島は東亞の中庸緯度に在つて此等の地文的要素の大陸と大洋との間に互に作用する利益も不利益も共に受けるのであるから、上述の影響を正常に認識せねばならぬ。

その中でも冬季高壓低溫の大陸と、比較的到低壓高溫の海洋との間に生ずる北西氣節風は、我が群島の氣溫を緯度に相應するより著しく低下してゐる一例の如きは不利益の場合である。此の事實を無視して單に海洋に因る氣候の緩和だけを高調し、強いて群島氣候を溫和とのみ曲解するのは國民の衛生上の注意に缺陷を生じ、住宅建築の方針に誤謬を來す危険がある。

此の頃壯丁の體格試験に現はれた結果から、國民健康の逐年惡化することが高調され出したなども、此の見地からは怪むに足らぬもので、少くも十數年前に既に氣づかれるべきであつた。世界戰爭を楔機としての經濟生活の激變は衣食住の何れの方面にも影響し、就中中層以下の住宅は兩戸と障子に代るガラス戸の安價建築となつたのは尤も著明な變化である。ガラスが紫外線に對して不透明なる事實だけは此の頃漸く注意を惹きはじめたが、換氣及び保溫の不十分な狹隘な二階屋の非衛生は何人の念頭にも上つてゐないらしい。冬季の濕度の變化と日光の効果を考慮すれば、此の如き

不健康な住宅に生息する外なき國民多數の不幸を默殺出来ない。最近數年間の壯丁の大多數は物價の急激な騰貴に續いた不景氣時代に成長した兒童で、營養の不十分がまた體格の劣弱に大に與つてゐることも容易に領かれる。

故に東亞氣節風地域に屬する我が國民は徒らに氣候の溫和を妄信して、衛生の必要な注意を等閑視しては、一朝一夕に取返し難い不利益に曝露されるかも知れぬと杞憂される。

然れども四面環海の我が群島及び朝鮮半島には大陸住民の得る由なき水産の富源といふ天恵を享受してゐる。甘薯を以つて穀物に代用する位に確確の豆南諸島の住民の如きは全く魚蝦が生命の第一要素を成し、海の幸が如何に國民の成立に有力に働いたかは、我が史乘に明かに示されてゐる。フエネシア民族の古代地中海に演じたと同じ役割を、我が國民は中世以後今日に至るまで更に廣大な太平洋の海面に演じ來つたのは漁業から海上發展が起つたもので、熊野灘に面する狹隘海岸の漁民は先づ房總海岸の漁場を開發し、更に進んで北海道を開拓し、濠洲に渡つて木曜島の眞珠撈取業までも試みたのは久しく人口に膾炙する所で、兩三年來四國南岸の漁船は遠洋の捕鯨に成功し、終に南極大陸に英諾兩國と角逐せんとする壯圖を企てつゝある。

此の意味で局限された陸面の所得に満足し得ない我が國民の活動が海上に發展したのが光輝ある國史の誇りの一特色となつてゐるのみならず、一朝外敵の包圍を被る極悪の場合を想像しても、近

海に於ける漁船の出勤が可能なる限りは、肉類の缺乏によりて國民全體が榮養不良の状態に轉落する危殆に瀕することは先づない譯でもある。故に聯合國の包圍の爲めに兵糧攻めに遇つて屈從を餘儀なくされた獨逸帝國の悲境に我が群島を陥れんとする非人道的な計畫が實現されないと樂觀し得るのである。

我が群島と同じ面積の國土が大陸内部に置かれたと假定せば、之より生ずる地文上の影響は姑く考慮せぬとして、陸上の境界線に限定される活動の不自由は平時にも戦時にも殆んど想像することの出来ないものがある筈である。試みに屬領を除いた我が領土に殆んど等しい波蘭共和國の一例を挙げれば直ちに彼我の位置の利不利は明かである。波蘭は中歐と東歐との間に介在するカルパシア山脈の北に向つた斜面を占め、而かもバルチック海岸から東プロシアに隔てられ、陸内交通の大動脈たるヴィスチュラ河の出口は之に遮斷され所謂廻廊地帯が現在死活問題となつてゐる。その關係は恰かも東亞大陸地域に於ける河北と江南との中間を占める河南地方の如く、山東江蘇の海岸に達する領土を持たぬ戰國時代の韓・魏兩國が齊・吳・越三國に海上に達する交通を妨げられたのと同じ不利を被つてゐる譯である。建國以來約一千年を経過する間に最初は土耳其及び韃靼民族と戦ひ、コサック、プロシア、モスコビア等の新勢力の勃興以後に至り、内部の不和は瑞典國の南進と共に間斷なく誘發され、終に獨逸露三國に分割されて仕舞つた。幸に羅馬カトリック教に屬する信仰が

國民結合の最も重大な要因となつて、民族としての獨立性が緩かに維持されたもので、第十九世紀末の文豪ヘンリック・シェンキエヴィッチの愛國に燃える筆端に躍如たる第十七世紀の波蘭の狀態は民族の生存競争の如何に苦しかつたかを窺ふに足るのである。

河南地方は稍之と異なるものがあつて、波蘭が羅馬帝國の勢力が波及せぬまゝに中世に入つて、基督教の傳道に初めて覺醒したのとは反對に、洛陽を中心とする漢民族文化の代表的地區ともいふべき位置を占めたことで、秦以後の統一された國家が出来る毎に常に樞要の地方たるを失はなかつた。然れどもその統一が失はれることに必ず大小の戦禍を被り、漢代以後次第に漸く廢頽して來た悲運は否めないで、兩者共通の宿命が憐まれる。

我が群島が一葦を隔てた大陸側の治亂興亡に影響さるゝことなく光輝ある獨立の存在を續けて、世界にユニークな金甌無缺の國體を誇るのに、此の地理的位置が大に與つてゐることは我々の絮説を要せぬ所である。一千餘年前の過去に於いて隋唐の脅威が朝鮮半島に加へられてもその餘波を蒙ることなく、歐亞兩大陸を馬蹄に蹂躪した蒙古民族の暴力をも完全に逐斥し得たのは、此の如くして養はれた國民の自信力に仗るのも同じく明かである。

國家非常時の叫聲響き渡る今日となつても我々は蒙古襲來の當時以上に潑刺たる國民の自覺と奮起により難關を突破し得ると確信し得る理由は一にして足らぬが、此の地利と人和を無視する様な

行動が國民一部にでもあつてはそれだけ事態を惡化し得るから大に警戒する必要がある。太平洋彼岸の流言かも知れぬが、アラスカ方面に飛行機一千臺を容るゝ設備の計畫が起つたといふ如きは、忽必烈汗が弘安の敗績に懲りずまた濟州島を牧馬場として、長距離の運搬による馬力減退の缺陷を防ぎ、以つて再舉を企てたのと似通ふ點がある。故に神風に依頼する代りに機械力戦で威嚇せんとする歐米人の常套の手段を封するだけの準備がなくてはならぬ。

私は昨春の劈頭に非常時の意義は單なる條約の存否による突發的戦争の可能性よりも、列國の不景氣に恵まれた我が輸出貿易躍進が嫉視の目標となる包圍政策 *Einkreisungspolitik* の方が遙かに深く憂慮されねばならぬことを高調した。世界の隅々に透入する我が國產品に對する排貨運動が倍激烈となる結果に想及して、廣大な太平洋を舞臺として活動の自由を確保し、之を利用する方策をあらゆる方面から考究せねばならぬと痛感するのである。

以上長短三篇は非常時の叫ばれつゝあつた間に執筆した所に係り、山雨來らんとして風の滿つる感に堪えずして、胸臆を披瀝したのであつた。然るに之に對應する五年計畫の國防充實に先だち、蔣政權の挑戰的態度から盧溝橋事件となり、狂暴の限りを盡して自ら好んで流血の慘禍を招くを顧みぬ窮狀に陥りつゝある。

第六篇

最近北支那に於ける戦争の地理學的考察

一、北支那黃土地域に於ける戦争の地形的考察

日本國民に豫感された非常時は彌、到來した。我々は今や容共聯蘇の方針まで採納した毒皿主義の南京政府の不法暴戾なる指揮に、傀儡の如く操縦される民國のバルチザンそのまゝの匪賊的軍隊と直面することゝなつた。七月上旬以來の我が駐屯軍の正々堂々たる軍事行動により、北京・山海關を連結する北寧線より東北一帯の地からこの匪賊的軍隊を掃蕩するを得たので、拂つた犠牲に對する十二分の好結果を收めたから滿腔の熱涙を以つて此の戦闘に與つた殉難烈士を哀悼景仰しつゝ、我が皇軍の向ふ所前なきに、今更ながら感激措くなき能はぬのである。

然しながらこれは一つの序幕である。蘆溝橋に於ける第二十九路軍の襲撃はその拍子木で、切つ

て落された舞臺の奥又た奥は廣く且つ深く、その見透しは容易につかないが、我々の立場から觀て、今日以後に演出さるべき活劇の舞臺そのものに見逃がされない重大な特異性が看取される。茲にこれ等を指摘するのは我々の當面時局に對して盡すべき義務の一つであらうと信ずる。

私の重大な特異性といふのはシオン氏の北支那の別稱として「黃土國」Le pays de la terre jaune と呼んだ語で言ひ現はされるもので、私は北支那の第一印象から之を裏書するの躊躇せぬ。戰場となる場合にこの土地が地形上に持つ特殊の意義の梗概を左に述べる。

二

海路北支那に行く旅客は渤海灣に入るまでは海水の色に何等の異狀を感じないが、灣を横切り白河河口に近づくに及んでその濁濁に驚き、大沽を過ぎて白河を溯航すれば、その放出する土沙が遠く海上まで浮遊して廣がつて行くことに氣付くであらう。次に天津から北京まで鐵道に由るとすれば、之に近づく頃に車窓から疾驅する馬車の跡を追ふて屬がる土烟が風景の一特色を成すのに注意するであらう。

若し又た西北の大陸から吹く風の強い日に、天津から津浦鐵道の沿線を旅行したならば、天地晦冥咫尺を辨せぬといふ支那流の言ひ現はし方が少しも誇張でなく、黃塵萬丈などいふ生やさしい形

容詞から到底想像されない。私は五月下旬に天津でこの所謂蒙古風に遭遇した時には、風力は強いと感ずるまでとはなかつたが、薄曇の空が次に暗くなり気温がぐんぐん昇つて、蒸熱が堪へ難くなると共に、深い霧がかかり始め、終に窓外の間と隔てぬ樹木までも幽かに視えるといへば視えるばかりになつて、二三時は全く外出が出来なかつたのである。此の體驗により幼時に詩經で讀んだ霾即ち「つちふる」といふ霾風 Dust Storm の氣象上の意味が明かになつた。翌年二月下旬に未成の津浦線に竝走する山東街道の德州附近では、厚い綿入れの幌を下した支那馬車旅行の道中で、前の時よりも遙かに強く吹き猛ける西北風に遭遇して、終日之を冒して南下した。此の時は幌の間隙から吹き込む土埃が目鼻口の何處へも入つて來るので、殆んど窒息する位に苦しんだ。

此の霾風の荒れる北支那の大平野は乾燥無雨の大陸内部の沙漠地帯に發生する冬の季節風に運ばれて空中を飛んで來た塵埃に埋められたのであつて、今も尙ほ同じ作用が繼續するから、我々の體驗した特異の氣象現象が起るのである。此の塵埃の堆積層を成すものが黄土で、上古から漢民族の住地であつた北支那では、土の固有の色を黄として、之に東を木とし、西を金とし、南を火とし、北を水とし、青赤黄白黒の五色を木火土金水の五徳に配する基本的觀念をも生じたのである。即ち北支那の地方色は黄色であつて、シオン氏の稱呼はうまく特性を道破したものと見られる。

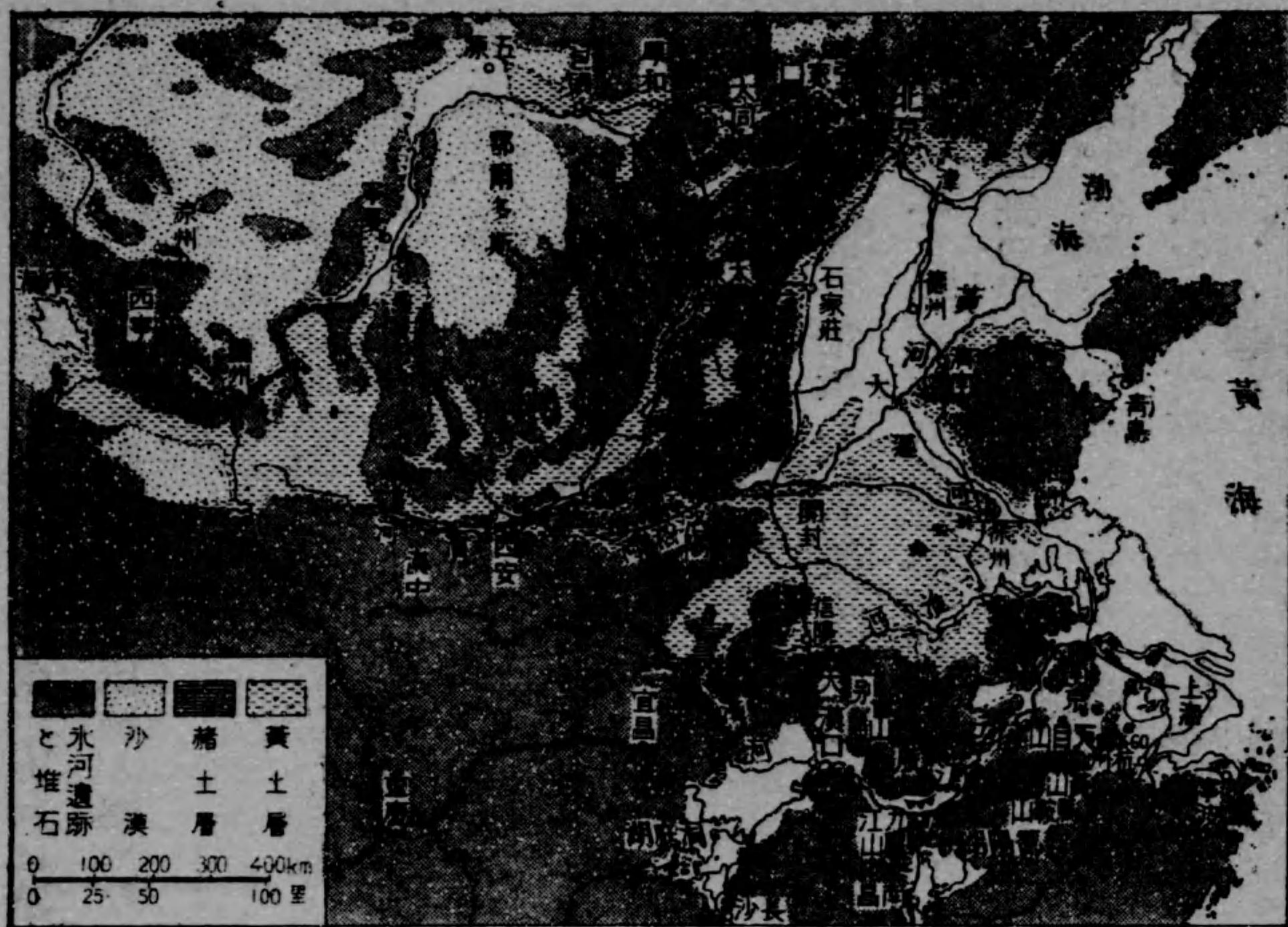
現在の漢民族の搖籃地たる此の黄土國の特性はこの民族の辿つて來た幾千年の歴史を理會せんと

するに當り、先づ正確な認識を持たなければならない。

三

北支那で黄土と呼ぶ岩石の性質はライン地方に出るレストガと略ぼ同一で、北米に出るものはスペイン人がアドベ Adobe と呼んでゐた。その化學成分は珪酸が過半を占め、之に亞いで石灰・礬土が多く、炭酸も必ず相當に含まれてゐる。外觀は粘土及び殖土に似てはゐるが、多くは白つばい黄灰色を呈し、顕微鏡下で見れば、稜角ある石英の粒が見え、觸覺には殆んど滑かである中に幾分ザラつく感じがある。粒子の大きさは均一にして集合状態は疎鬆で、吸水性が強いのも亦その一特色である。

厚い無層狀に堆積し、石英と共に之に含まれた雲母には水に運搬される時に起される様な一定の位置に水平に排列された形跡が認められない。多くは石灰質を帯びるから滲入水によつて聚合して奇妙な生薑の根の如き形状の結核となり、黄土小僧 Lösmannechen 又は黄土人形 Lösppuppen と呼ばれる。無層狀の割合に丈夫な土層ではあるが、その上面に生長した植物の根の下方に延びてゐたもの、表面を包んだ石灰質の皮殻が無数の細管を成して内部に存在し、此等のパイプの排列状態に支配されて、一種の垂直節理の様な割れ方が出來て、その露頭は何時も直立した壁狀の崖となる傾



第二十六圖 黃土分布圖

向が著しいのがまた黄土の一特色である。

その分布を観るに沙漠の周辺に發達し、中央アジアから西亞に延びて、東歐カルパシヤ山脈の北麓に沿ひ中歐に及び、西端はライン河谷に達してゐる。此の西方の延長部では山谷の凹凸が多いためか、中亞の如き均一性を失ひ、層状になつた具合が頗る著しく、従つてその成因が風力のみではなからうといふ異説が相當強く主張されて、リヒトホーフエン氏の北支那の體験による風成説 Theory of eolian origin に反對する説が出てゐる。

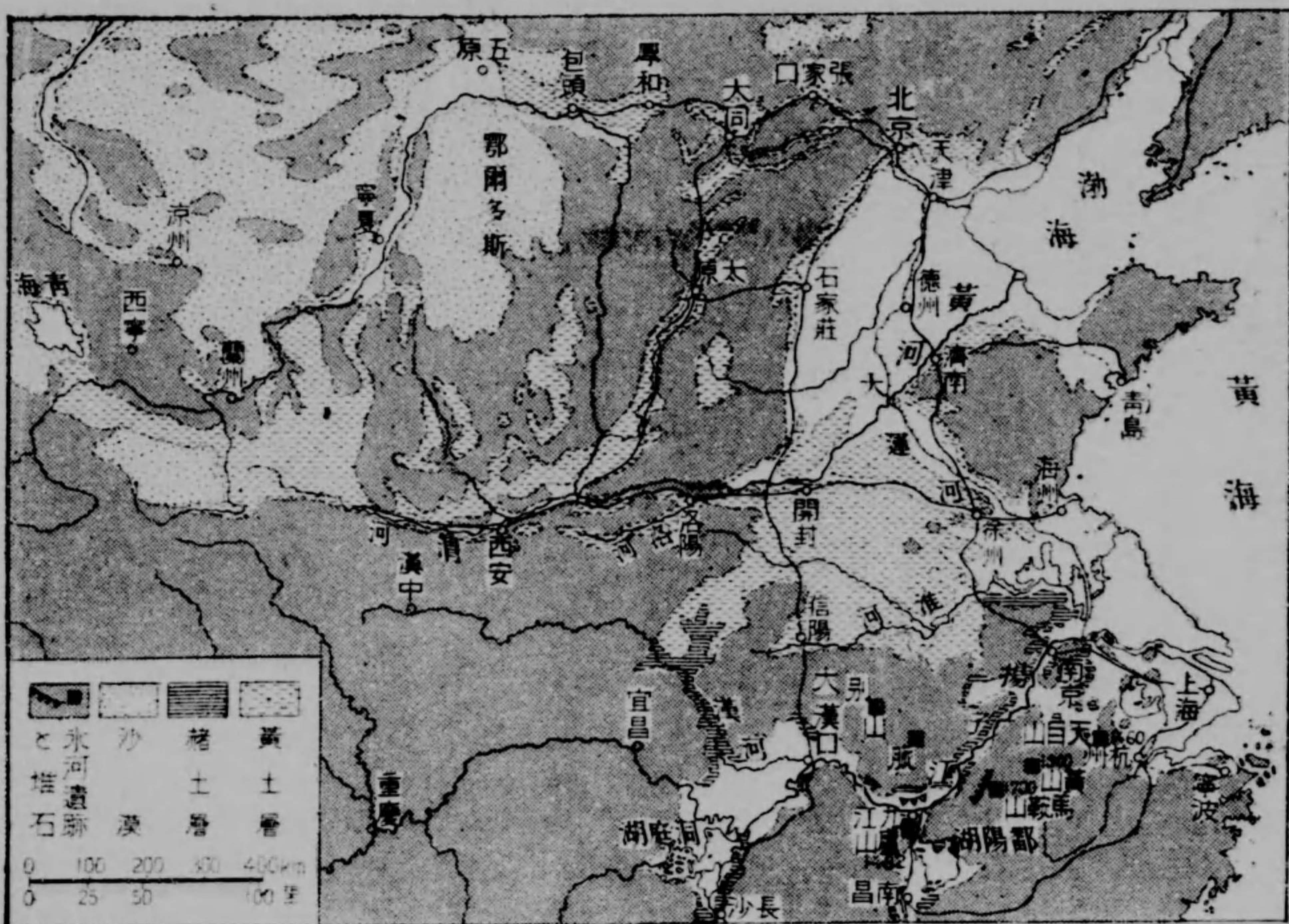
リヒトホーフエンの黄土風成説といふのは一八七〇年旅行中に發表した考へで、沙漠を圍繞する草の生えたステップ地帯へ間斷なく吹いて來る風に浮游して微細な塵埃が此の草原に溜つ

たものだといふのである。勿論降雨があれば草から洗ひ落すのは當然期待され、雨水の洗滌作用を否定せぬが、水中を運搬された堆積物と認めない。

東西中央アジアを探検したオプルーチェフは庫倫から張家口まで蒙古ゴビ沙漠を横斷した印象記にゴビは全體が流沙に蔽はれた沙漠でなくて、大體はステップの性質を有すると考へた人だが、此の人はリ氏よりも廣く沙漠地帯の南北兩邊を踏査し、矢張り之と大同小異の風成説で黄土の成因を説明した。私と前後して山東山西を旅行したペリー・ウィリス氏はオ氏より更に多くり氏の考説を變更せんとしたが、私はリ氏と同じ體験をしたので、リ、オ兩氏の所見が大體に於いて妥當だと考へてゐる。

此の風成説に於て運搬作用の原動力となるのは大陸内部に行はれる季節風で、冬季過冷の内部の高氣壓地域から周邊の低氣壓帯に向ふ氣流があるのが原因となつてゐる。此の塵埃を運ぶ氣流はアフリカ洲のサハラ沙漠にも行はれ、南風がこの作用を營んだ實例は一九〇一年三月九日から十二日の四日間に起つた場合で、イタリヤ・獨逸・スウェーデン南部に雨つた塵埃の量が百八十萬噸で、アフリカの沿岸地方には此の時一億五千萬噸雨り積つたと推算されたのである。

北支那で我々の遭遇する霾風の場合は必ずしも沙漠の沙と共に風によつて造られた微塵が全部である譯でなく、西北風に煽られた中間地帯の黄土が之に與るのは勿論である。然れども此の兩者の



第二十六圖 黄土分布圖

向が著しいのがまた黄土の一特色である。

その分布を観るに沙漠の周邊に發達し、中央アジアから西亞に延びて、東歐カルパシヤ山脈の北麓に沿ひ中歐に及び、西端はライン河谷に達してゐる。此の西方の延長部では山谷の凹凸が多いためか、中亞の如き均一性を失ひ、層状になつた具合が頗る著しく、従つてその成因が風力のみではなからうといふ異説が相當強く主張されて、リヒトホーフエン氏の北支那の體驗による風成説 Theory of oolian origin に反對する説が出てゐる。

リヒトホーフエンの黄土風成説といふのは一八七〇年旅行中に發表した考へで、沙漠を圍繞する草の生えたステップ地帯へ間斷なく吹いて來る風に浮游して微細な塵埃が此の草原に溜つ

たものだといふのである。勿論降雨があれば草から洗ひ落すのは當然期待され、雨水の洗滌作用を否定せぬが、水中を運搬された堆積物と認めない。

東西中央アジアを探検したオブルーチェフは庫倫から張家口まで蒙古ゴビ沙漠を横斷した印象記にゴビは全體が流沙に蔽はれた沙漠でなくて、大體はステップの性質を有すると考へた人だが、此の人はリ氏よりも廣く沙漠地帯の南北兩邊を踏査し、矢張り之と大同小異の風成説で黄土の成因を説明した。私と前後して山東山西を旅行したベリー・ウィリス氏はオ氏より更に多くリ氏の考説を變更せんとしたが、私はリ氏と同じ體驗をしたので、リ、オ兩氏の所見が大體に於いて妥當だと考へてゐる。

此の風成説に於て運搬作用の原動力となるのは大陸内部に行はれる季節風で、冬季過冷の内部の高氣壓地域から周邊の低氣壓帯に向ふ氣流があるのが原因となつてゐる。此の塵埃を運ぶ氣流はアフリカ洲のサハラ沙漠にも行はれ、南風がこの作用を營んだ實例は一九〇一年三月九日から十二日の四日間に起つた場合で、イタリヤ・獨逸・スウェーデン南部に雨つた塵埃の量が百八十萬噸で、アフリカの沿岸地方には此の時一億五千萬噸雨り積つたと推算されたのである。

北支那で我々の遭遇する霾風の場合は必ずしも沙漠の沙と共に風によつて造られた微塵が全部である譯でなく、西北風に煽られた中間地帯の黄土が之に與るのは勿論である。然れども此の兩者の

外に第二次的の堆積を見た黄土が大平野には廣く分布してゐるのが、更に又た注意される。此の堆積物は現在の山間から流出する河水の冲積作用と相隨伴して出来たのである。此の風水兩成の堆積作用は急傾斜の山腹に第一次的堆積にも起り、無層狀黄土の外に成層黄土を見るので、中歐などで風成説を疑ふ學者が出たと想はれる。

氷河時代の間に出来た間氷期の黄土に關する問題なども、氣候變化と關聯して面白い題目で、最近ウィマスン氏等の考説が出たが、少し當面の考察から脱線するから、此處では論究せぬことにして、黄土の垂直分布に就いて尙ほ一言する。

黄土は渤海灣邊の低地から起つて、山西臺地の表面を被覆し、尙遙かに内部の青海邊まで延長し、二千乃至三千米の高度を占むものがある。従つて厚薄不定で、その堆積作用の起つた鮮新世以後の一般に鈍い凹凸のみの原表面を更に鈍い波狀の地形に埋没したことが想像され、山西の露頭では三百米弱の厚さに堆積したのが目睹されてゐる。

四

今述べた垂直分布から容易に想ひ出されるのは、日本内地の火山堆積物の色々の高度を占めて、各特有の地形を呈するのと、幾分類似した所があるべきことだが、實際は共通な特性は殆んどない。

黄土に行はれる浸蝕には垂直の割れ目の崩壊を促す雨水の洗滌作用が第一で、更に水が之を流し去ることはなく、間斷なく行はれる風に運び去られる削剝作用が遙かに著しく、車轍の跡が生ずる溝の土が飛散して行き、永い間に平地の道路は交通の頻繁度に應ずる深さに凹むのである。火山灰の堆積した大火山の裾野などには妙高山麓の大田切・小田切の如き狭く深い溪谷があつて、交通はこれに妨げられてゐるに拘はらず、道路が深まつて仕舞ふ様には成つて行かない。名古屋の東方に展開した「惡地」Bad Land の地形の處も類似して居りそうで、これも全く趣が異つてゐる。故に内地の地形に慣れたものが黄土の地方に行けば、種々の豫想も豫想もされ難い地形に遭遇してまごつき得る。

前に述べた如く大陸内部から風に運ばれたものが第三紀末葉の鮮新世の既成地形の山地平地を被覆して、之を埋没したのみならず、今の渤海灣から奥に深く灣入した海面が淺くなり、之に續いた海岸の土地が高くなつて仕舞つて、現在の太平野の埋立が出来上つた。第四紀に至つて廣大な奥地から流出する河水が山西高地の南部に沿ひ、此の平地に出た以後に及び、流水に含まれた黄土の泥が引續いて沈積して、此の海面の埋立が倍々進行したのは勿論である。此の如く平地に堆積したのも亦た大部分は黄土質の土砂であるし、現今に至るまで繼續する微塵の土が風の吹くことに積りつゝあるのだから、或る程度までは山地にも平地にも共通の黄土地形として區別されるべき、地盤の

性質に起因する特殊の凹凸が認められるのである。

海拔の高い山地に於いては垂直節理によつて生ずる地形の極端は殊に著しい。山西地方では平坦形を呈する高地の上で展望すれば、際涯の知らぬ様に平坦又は鈍い波状に見えて、而かも一寸と先きに歩を進めて見ると、豫期せぬ深い底も知れぬ様な溝が横はり、立脚地と同じ高さの地面は之に隔てられてゐる。之に達する爲めに迂回しても、この深い溝の先きは屈曲してゐるから、呼べば答へる兩點間が全く断絶して仕舞つてゐる。此の如き断崖に臨む高地の端は次第に狭まり、二つの溝の落合ふ處では、幅二米以下の部分まで崖上平地の高さは減少せず續いて、尾根傳いに溪底に降ることが出来ない。又たこの溪底を辿つて行けば、屈曲又た屈曲して纒かに崖上に匍ひ登り得たとして、顧みて何處から來て何處に着いたのか、全く方角が判らなくて茫然たらざるを得ない。これは全くの迷宮である。

黄土地域の此の如き山間では聚落は崖下に少し平地のある處を選び、崖面から掘り込んで洞穴を造つて、幾室かに掘り廣げ、窓まで之を穿ち、例の石灰質の結核を粉碎して拵へた石灰粉を塗つて白壁とする。それだから遠くから望んでも、何處に村落住居があるか殆んど知れない、生氣のない荒涼たる光景を呈する茫茫たる土ばかりの地平線に少しばかりの樹木の群れが見えるのは水のある場處で、そこに人家があるべきことが推定される。幾百千年の間一つの窟居が破壊もせず持ち耐

えられてゐるのだから、黄土層の丈夫さは推知される。

然れども山西・陝西・甘肅の諸省の地方には、稀れではあるが、激震に見舞はれることがある。此んな時には崖崩れが窟居の破壊を意味し、夥しい人畜の死傷が起る。秦嶺に沿ふて東西に走る一線の北側に屬する陝甘兩省が最も著しく、前漢地節二年（西曆前六六年）關中大地震の死者六千人、唐開元二十二年（七三四年）の渭水上流の秦州での死者四千餘人などは被害の小さい方で、明嘉靖三十四年（一五五五年）の陝西を中心として河南・山西に亘る大地震に死者八萬三千人を出した記録がある。周の幽王が褒姒を嬖愛して犬戎の襲撃を受けて、洛陽遷都を餘儀なくされ、周室はこの女難で衰弱したといふが、その前年即ち幽王二年の西周涇渭洛三川が皆な地震で河流の壅塞されたといふ大地震があつた。これが恐らくは嘉靖大地震と同じ様な激烈を逞くし、衰亡史の一大原因となつたのは疑を容れない。民國になつた後にも、その九年と十六年（一九一七年）の二回甘肅に大地震が起つて、後の時に死者數萬人に上つた。その死傷被害の多いのは窟居の多い聚落様式が然らしめたものと此の場合に認められたのであつた。

同じく黄土地方たる山西地方でも地震の損害の記録はある。私は張家口の南の宣化府城壁に登つた時に、壁上に古い大きな龜裂があるのを見て、何時の激震かと疑ひ、後に多分嘉靖三十四年に續いて四十年（一五五〇）年に陰山山脈南麓一圓を震撼した時であらうと推定した。

海拔高度の著しからぬ大平野では山地に於ける黄土の浸蝕地形も亦た頗る緩和されてゐる。然れども京漢線の鄭州驛から隴海線を西進すれば、黄河鐵橋の西南に斷崖を露はした黄土層の削られた幅の廣い谷に入り、間もなく黄土の上を走る鐵道水準から深く穿たれた溝の底を通る道路が見え、その稍廣い谷底にある村落も見える。虎牢關や函谷關の如き一夫之を守り百夫の通過を許さぬといふのは、實際は數十米乃至百米に達する黄土の厚層に穿たれた通路であるから、此の土地の細形に不案内な客兵は容易に突破し得ない譯である。峨々たる峻嶺幽谷に阻まれてゐると想つたならば大間違ひであるし、また遠望して地形を推知し難いのが、此の要害の眞意義である。

大平野の東に蟠踞する山東山地に至れば、概ね更に緩和され、膠濟線の車窓などからは、黄土地形の特性は判然と注意されぬが、馬車で旅行した當時は村落の出入りに溝道を通過することがあつて、時に他の車輛と行きかわすのに暇取つた経験がある。

泰山山脈の北斜面では此の如く餘り特性を感知せぬが、その西北端では北西卓越風に面するから、黄土の堆積が更に厚くなるのは當然である。その一例は濟南から泰山の南麓にある汶河の流域に在る泰安府に通ずる舊街道であつて可なり深い溝になつた處がある。此處は突兀たる泰山の西面に沿ひ、之に吹きつけた相當厚い黄土の堆積を見たのである。

私は街道以西の實地を踏査しなかつたが、戰國時代の齊國西界に在る險隘の要地として有名な亢

父は今の運河の道筋に當る濟寧州に在り、その西の曹州鄆城に陽晉城の遺跡がある。蘇秦が齊の宣王に秦が齊を攻める困難を指摘し陽晉の道を通ぎ、亢父の險を経ねばならぬ、此處は車輛が軌をならべ、騎兵が列を作り得ない、百人で守れば千人でも滅多に通れぬ、といった語から推して、黄土地形が此の邊まで及んでゐるかと思察せられる。

五

北支那の廣大な内陸から流出する水は集つて黄河となつて、二等邊三角形に近い大平野の中央に出て海に注ぐものが、唯一つしかない。その水源地は西藏高地の東北隅の不滅の氷雪を戴く崑崙山脈及びその背後の高原である。黄土の堆積は此の地方の海拔約三千米に達する高地上にも行はれ、黄河は黄土地域を貫流する河流であるといつてよい。その流路は蘭州の北まで高峻地帯の峡谷を成し、此處から賀蘭山脈即ちアラシヤンの東邊に沿ひ寧夏の東を経て北流し、陰山山脈の南麓に接して東に折れる。これより包頭の南を経た後、再び右折して南流する間は廣濶なる河谷を成し、山西の汾水、陝西の渭水を容れるまでの間には壺口・龍門の峡谷に扼せられる。此の大屈曲の部分は中流と呼んで區別してよい。渭水合流點の南岸に在る潼關がその要地で、これより東屈して、山西山地と東部秦嶺北麓との間の峡谷を突破して初めて大平野に出るのである。

黄河の流路は此の如く大屈曲を成してゐるから陝、甘地方と大平野の間の交通線は洛陽・長安を經由する秦嶺北邊に沿ふのと、山西北部から包頭・寧夏を經由するものとの二つがある。前者は隴海鐵道の線路で、後者は綏遠・包頭及び將來開かるべき寧夏に達する鐵道の通すべき線路である。又た直線に近い前者は崑崙山脈の北麓に起つた周人の渭水盆地に進出した徑路で、六盤山即ち隴阪を踰えるものであるが、周初穆王の中央アジアに往復した頃には、洛陽から汾水に沿ひ北に向ひ、馬門の邊から包頭の東方にて黄河屈曲に出で、後者に沿ひ寧夏の方面に行つたので察すれば、交通幹線は寧ろ後者であつたらしい。此の時には鎬京と洛陽との往復に潼關から函谷關を經由して洛陽に出る通路も亦た未だ開けてゐないで、長安附近から蒲州解州等を経て、山西山地の南部地方を迂廻して、孟津で再び黄河を渡つた此の間を直通する街道は山西地方に三晉の諸國が割據した戰國に至つて、秦人が中原進出の努力が開かれたものと想はれるのである。

洛陽が北支那東西の交通上に有する意義は頗る重大で、長安と共に唐代に至るまで、久しく首都又は第二都たる重要性を有したが、その理由は周人が大平野を經略せんとした時に定めた如く、天下の中を占め、所謂山東即ち大平野とその東及び南を含む大小諸國を控制するに無比の利便があることで、その要點は二等邊三角形西邊の中間にある位置に在つた。而してこの利便の意義たるや、渭水盆地を背後に控へてゐると、之を失つたのとで全く顛倒する。東周が之を失つた一面に、大

平野には韓・魏・齊・楚が次第に強くなり、周室は孤立無援の弱小國となつて、宗主權がない空位を擁する外なかつた。

最近に蔣介石は洛陽に本營を置くといふが、容共聯蘇の方針は此の背面地の犬戎や秦人に占領される西周の末路に思ひ到らぬのではなからうか。宋・金等の中央アジアから蒙古の席卷の勢に屈服した歴史は、如何に對日政策の苦し紛れの努力が成功しても再び失敗の覆轍を踏むものでなからうか。

六

黄河の名は黄色の泥に濁濁するのを表徴したもので、河水一石に七斗の泥があると言はれる。私は冬季濟南の北で渡つた時はその幅が狭くて水量が甚だ少く、水質も餘り濁つてゐないので、この標語は支那一流の誇大かと疑つたが、その後九月に上流の京漢線鐵橋を渡る時には、夏秋の交の大漲溢期であつて、幾哩か目測の出來ない河幅全部になつて、水位は橋柱の殆んど上端まで高まり、濁流は殆んど水を含む泥が渦巻いて動くといふ方が適稱と感じ、決して七斗の泥といふのに何の誇大もないことを知つた。(以下述べる所は第三篇一一一、一一二兩頁と参照されたい。)

此の如く氾濫する河水が起す沖積作用の異常に大なるはまた想像に餘りある譯で、孟津から下流

では河床が埋もれて高くなり、兩側の低い處へ決潰することは避けられない。最も古い河道は榮澤から北に折れて山西山地の東界たる太行山脈の麓に接して北流し、漳滹沱兩水は今より遙かに西で之に合して、天津の邊で海に注いでゐた。大陸澤その他の沼澤はその遺跡と推定される。その後右岸が決潰して東に遷り、後漢代には滑州から東北に流れて山東の利津に注ぎ、宋代には天津の方へ流れ、金の時には陽武から東流して山東の梁山泊に至つて二派に分れ、一は利津に入り、一は泗水に入り、淮水に合して江蘇に入つて揚子江口に近い處で海に注ぎ、元明以來は東南に向ひ、汴泗兩水の河道に沿ひ淮水に入つた。現在の河道は清代咸豐四年にその左岸が決潰して生じたもので、大清河の河道に由り、再び渤海に注ぐことになつた此等の變化に伴ひ支流及び派流の河道の離合が起り、濟深濮等の諸水の如き地名にのみ残つてゐるものを生じた。此の變遷を考慮せねば歴史上の大決戰のあつた場處とその進行を理會し得ないことが多い。その二三の例を擧げるならば、周武王が孟津の方向から最古河道の左岸を北上して河北河南省界の牧野に殷紂王と會戦したのであるから、狭い左岸を利用して割合に少い兵力で殷の大軍に當ることが出来たのである。項羽が秦兵の包圍した鉅鹿城を救ふ時に渡つた河水の位置も現在と全く異つてゐる。又た曹操が募兵で河北一圓を含む地方の大軍を以つて攻めて來た袁紹に對抗した時に、巧みに利用した黄河も同じく現在の地圖の河道から遙かに北に偏在し、黄河は今の濬縣の南を流れ、その北岸に黎陽があり、南岸に白馬津があ

つた。兩軍の決戰地たる官渡は今の黄河の南で、開封府西に在るが、當時は濮水の南にある汴水即ち官渡水又は渠水に近く、この水南に袁紹の舊營及び曹公壘があつた。

此の故道の左岸に太行山脈から流出する小河流は頗る多く、何れも平時は水量極めて少いが、暴漲により交通に支障を生じ得る可能性はある。京漢線の西側から來る此等の諸水が古期岩層の露はれる山地から黄土丘阜に流れ出る邊では、突然地形に著しい變化があるのが又た注意される。私は琉璃河の上流溪谷に入つて、その黄土地形から一變して深岨となるのに一驚を喫した經驗がある。

黄河は榮澤から東で幹流の外に數多の派流があつて、その或るものは運漕に利用され、又た灌溉にも役立つのである。河北の諸水の中では衛河は重要な水路であるし、又た榮澤から東南に流出する狼岩渠が汴水の上流を成し、隋代に揚州江都に通ずる重要な漕運路となつて唐代に及び、我が入唐僧の長安に往復する頃に盛んに利用されてゐた。

潁淮等の諸水の水路も亦た交通運輸に役立つ、潁水の上流に在る周家口がその航路の上端である爲めに、河南の一名邑となつてゐる如き例がある。

七

河道の變化は又たその舊進に沿澤を生ずるものであるから、舊黄河は大陸澤、寧晉泊の如き遺跡

を存し、又た西淀及び三角淀は上古の河口を代表する大なる湖水となつてゐるものである。禹貢にいふ逆河なるものは海水の逆上を意味し此の邊一帶の沮洳地はその遺跡と考へられる。北宋の眞宗の時に朝臣が治水の爲めに此の方向の新渠を開いて、灌漑に利用しつゝ、契丹の南侵を阻止する防禦地帯とするがよいとの一石二鳥主義の建議をしたものがあつた。

此等の沼澤よりも更に大なる意義を有するものは黄河派流の山東山地の西邊に衝き當る附近にあるもので、現在の黄河右岸の東平・蜀山・微山諸湖は最近河道北徙以前に之を連ねた一線が大運河中部の大動脈として働いた。その西の鉅野その他の諸沼は大抵涸渴し、水滸傳で名の知られた梁山泊の如きも消失してゐる。又た此の湖列は三角形の東南隅に續いて洪澤・高郵兩大湖があつて、淮水の兩岸にある淮山北麓の大小諸沼澤と共に一大沮洳地區を成し、秦帝國の末路に蜂起した所謂山東群雄の活躍の舞臺を成した。爾來幾千年常に匪賊の出沒するに都合よく、水滸傳に梁山泊附近の模様を形容して、茫茫蕩々たる蘆葦の水港で、大部隊の官軍舟船人馬がなくては之を捕捉し難いといつた數句で景觀を想像するに足る。

八

以上述べた所だけで十分語り盡し能はぬ。氣候と植物が此の黃土地域に及ぼす影響も一考せねば

ならぬ。黃土成生に主要なる因子が氣候の半無雨性で、草木類が多く生長し、樹木は極めて局限された部分にしか存在し得ない。又た耕作植物は麥・黍・高粱の類が古くから栽培され、棉花は近世の栽培に係る。此等の中で高粱は夏秋に茂つて、人頭を没する灌木林の如くなり、九月の交に刈り盡されるまでの三箇月許りとその前後との平野の景觀は全く異り、軍事行動には恐らくはこれが大なる障害となるべきである。又た夏秋の交は北支那の雨期で、塹壕がその爲めに深い泥濘に充されて、運動の自由の妨げられるのも想像される。

尙ほ又た黃土の地下水に鹽分が多く含まれて、飲料水の供給にも困難が豫想されるのであるが、大平野の多くの部分は第二次的黃土で、舊河床に砂層のある地下水を得る場合があれば、或は問題が緩和されるかも知れぬ。

語つて十分詳ならぬに拘はらず本稿の讀者が現に戰場となりつゝある地方に對して、幾分かでも認識を深かめることを得ば、筆者の望外の幸とする所である。

二、戦争に反映する支那の地理的特色に就いて

昭和十二年十一月二十八日奈良女子高等師範學校に開かれた奈良地理學會創立十周年記念大講演會席上で述べた講演原稿である。本誌上に戰場としての支那に關して屢々述べた所と多少の重複あるも、戦争の進展に注意する讀者諸君に局面に對

戦争に反映する支那の地理的特色に就いて

して考察するのに幾らかの御参考になるかと、茲に載せることにした。

戦争は色々の見地から観るも、極めて重大な意義を持つものであります。民族又は國民の生存競争の最も激烈な場面が歴史に描かれたのはヘロドトスの筆に表現されたギリシヤ人とペルシヤ人との間に起つた戦争であり、ツキデデイスの記載したペロポネソス戦争でありまして、ギリシヤ古典文學中に異彩を放つてゐる。春秋十二列國の間に行はれた争覇戦は春秋左氏傳に屢々見えまして、就中晉の文公が楚の成王を破つた城濮の戦は特に面白く、車戦即ち昔の戦車 Chariots を用ゐた戦闘が目にあたり観る如く實感を起させるのであります。三舍を避けるといふ言葉は此の戦争開始に當つて、楚に亡命中の約の如く、三日行程を退いて、楚王に讓歩した上で、已むを得ずに戦ふといふ形式を装ふたのに起つてゐるのは御承知の通りである。

歴史の記事中の戦争の話や、之を眼目とした戦記が此の如く痛切な興味を惹くのであります。我々地理學者の立場から観ても、戦争を通して地理學の種々の事實が明確に了解されるのであります。レオニダスの奮闘の場處、テルモピレのギリシヤ半島に於ける交通上の要地たる地形を確知するなどはその一例である。

私が支那の地理書に興味を持ちましたのは明治二十八—九九年に臺灣諸島誌を書く時から始つてゐるが、漢文の書物の記述の仕方が現場の真相を具體的に知るのに非常に困難を感じました。清朝初めに出た讀史方輿紀要(顧祖禹著)歴史地理の良著であると當時故島田篁村先生に推奨されて、之を讀んで見ると同時に、歴代正史(二十四史)の戦争の記載が、交通路その他の地勢地形に關する地文的關係を了解する手掛りとなることに氣付いた。

今回日本軍が正太線に沿ひ西進して太行山脈を突破するに當つて通過する隘路は太行山の八陘の一たる井陘であつて、之に設けられた關門が娘子關であつた。歴史上に初めて此の通路が見えるのは漢楚間の戦争に當つて、韓信が山西を切り従がへて、趙王歇・陳餘等を攻める時のことで、李左軍といふ軍師が陳餘に此の隘路を扼してその進撃を支へよと勧めた語に、井陘の路車軌を並ぶることを得ず、騎列を成すことを得ずといつてゐる。此の形容詞は實に面白いのでありまして、陳餘は之を聞かなかつて、韓信の通過を許したので、脆く敗れて仕舞つた。この時の記載から今回の正太線の激戦が一應はある筈なのが豫想されたが、果せるかな娘子關で閻錫山軍が稍々頑強に地形を利用して防禦を試みたのである。

以上述べた所から支那の地理を知るのに漢文の戦史を利用するのが頗る有效であることは明かであらうと考へる。私が茲に掲げた題の意味は此にある譯である。

二

此の問題は先づ支那、特に所謂本部十八省の全體に就いて考へ、次に南北支那に就いて考へねばならぬ。東半球大陸中に於ける位置・延長・面積・輪廓の形状・凹凸・海洋との關係即ち海岸線等の箇々の事項にそれ／＼説明を要するのであるが、その暇がないから十八省の土地の特色中で最も重要な一箇條だけを取つて述べる。

それは此の土地は東亞季節風地域 East-Asiatic Monsoon Region として區別すべきことで、アジア大陸面と太平洋海面との間に、大陸内部の冬の低溫で高壓な状態と夏の高溫で低壓な状態が交互して生ずる氣流の變化が規則正しく行はれる地域であるのである。

此の地域の地文的特色は之を基調とするもので、いふまでもなく氣候が嚴烈で、夏は緯度と無關係なほどに炎熱で、冬は酷寒である。七月開戦以來九月までこの炎熱に堪へて戦つた日本軍の努力は對して、超人的であつたといつてよい。今や又た山西は勿論、河北・山東に於いて戦ふ兵士は酷寒を冒さねばならないのである。南支と雖も戦局の迅速に進行するに従ひ、同じ困苦に堪へて行動せねばならぬ。春秋二季には特に晝夜氣溫の激變が起り、内地の氣持ちのよい氣候状態は全くないではないが、私の山東に於ける春四月頃の經驗では二週間と續かぬ様に感じたのである。

同じ地域の内部とて海洋の爲めに緩和された外邊との相違は著しく、大陸性と海洋性の對照は想像の出来ないものがあることは申すまでもないが、唯一例だけ茲で附け加へて置きたい。昔宋時代の有名な畫家が書いた繪畫に芭蕉に雪の降つた圖があつて、批評家は之を實際の風景でない所を想像したものとして面白いと考へたが、それは認識の不足で、回歸線以南の廣東邊でも冬季稀に降雪があるのであつて、矢張り實景を寫した名畫なんである。緯度に無關係に冬季の低溫となり得るかから起る珍風景である譯である。

以上は全地域の氣候の共通性を指摘したのであるが、黄河流域即ち北支那と揚子江以南の南支那との南北の對照は地文的に見て頗る著しいものがあつて、それが今回の北支戦線と南支特に上海附近の戦争の進行の相違に密接な關係を持ち、著大な影響を示すのである。北方の乾燥なものと南方の濕潤な氣候上の對照がその基調を成してゐることは諸君の知られる所であらうと思ふが、その地形の成因に及ばした結果に就いては一言せねばならぬ。

三

フランスの地理學者シオン氏が北支那を「黄土の國」Loess Country と呼んだのは北支那の地方色、地方色否な地域色を巧みに表現した名稱であると前にも述べたが、此の地域的表土の特性が地

戦争に反映する支那の地理的特色に就いて

形を支配してゐると言つてもよい位に重要な役割を演じてゐるのである。

之と對立して南支那の表土の特性を擧げるならば、私は揚子江以南の赭土は黄土ほど顯著でないまでも、之れを「赭土の國」Laterite country と呼んで、之を區別するが面白いかと思ふ。

此の兩者は成因が異つて、黄土は乾燥な氣候の地方に風の堆積作用で生じたものであり、赭土は濕潤で日射熱の強い地方に主として水の堆積作用で生じたものとするが、先づ通説としてよい。即ち南北の氣候の對照が地方色の基調となつてゐると考へられる。

黄土の岩石學上の性質は極めて微細な粉末即ち微塵で、石英粒が大部分を占め、大氣中に浮游 suspend するから、風があれば氣流の方向に移動、運搬される。北支那の場合では蒙古新疆オールドス等の寡雨の地方に沙漠と共に生じ、洪積世から現在まで、沙漠の邊緣の草原即ちステップの部分に此の微塵が墜ちて、草のある爲めに地上に集積する。此の時草の根と莖が埋没するから、堆積層に垂直の空殻を残し、雨水は之に沿ふて地中に浸み込む。その結果は垂直の節理が出来る。黄土の地形の特色は平坦な表面に深い溝が出来てゐるので著しいが、此の垂直節理の存在する爲めである。黄土は中央アジアの海拔三、〇〇〇米以上の高地から一、〇〇〇米以上の高原狀の山西地方に廣大な面積を占め、大行山脈の東麓即ち山の陰になつた處に及び、山東山地でも冬季西北卓風に面する西と北の斜面に未だ相當に厚い堆積層を成し、分布の南界は淮水流域に達してゐる。又た此等の

地方から更に第二次的に黄河その他の大小河流の平地に堆積するものもあるから、大平野自身にも黄土地形がある。

山西は黄土地形の一標式と言ひ得る特色を呈する地方で、厚さ二—三百米に達し、第三紀時代の波狀を呈する平坦面の凹みを埋没した平坦面を成してゐる。展望すれば呼べば答へんとする場處へ向つて行くと、例の溝の様な谷に突き當つて、その數十百尺の溝へなか／＼降りられない。之を降りて谷底を迂回に迂回を續けて、漸く攀ち登つて見ると、全くの迷宮から出で、さて前に見た目標の場處が何處であつたか知れぬのにマゴつくのである。

京漢線の鄭州から西安に行く隴海線は洛陽との間に有名な虎牢關があり、その西に函谷關があつて、何れも戰略上の要地であつたが、その險阻なのは井陘が山西の古生代岩層の山嶽地帯たると趣が全く異つて、黄土の深い溝を通過するのに困難なるので生じたものである。

此等の垂直の壁狀を成した溝は穴居が容易で、従つて平坦な上の面を展望して全く人煙を見ないのに反し、此の如き溝の影に村落が作られてゐる。特に黄土下盤に石灰岩洞や帶水層のある岩層があれば、鹽分の多い黄土中の地下水と異つた良質の飲料水が得るから聚落の發生を起すのである。大平野の周邊では黄土堆積地の海拔高度が百米内外であるから、従つて山西地方の如く深い溝にならないが、數米の溝を成した道路が網目を成すのである。北支京漢線を北進し來つて、最前線の

堅固陣地を設けた良郷縣城の西に連る平地はその例で、二萬五千分一北京附近地形圖を見れば大平野の第一次及び第二次堆積に係る黄土の地形が何んな風になつてゐるか想像される。

大平野の中央部の戦争では城濮と馬陵の兩役が最も古いが、最もよく黄土地形の面目が發揮されてゐる城濮の戦は前に述べた如く晉文公が覇業を確保したもので、西曆前六三二年(二五七年前)周襄王二十年即ち魯僖公二十八年(春秋經傳集解卷七)に起つたものである。此處は山東曹州の北で、黄河はその附近を流れて屢々河道が變り、頗る正確を缺くが、今の濮縣の南の臨濮鎮が古の濮陽城即ち城濮といふのである。馬陵は之より約三百年即ち魏惠王三十年即ち周顯王二十八年(西曆前四一一年)に齊の田忌が孫臏の策を用ひ、魏の將龐涓を破つた場處で、その位置に異説があつて、大名府の東の邊に當てんとしたのもあるが、嘉慶一統志曹州(卷一八)に據れば馬陵は濮州の北三十里に在りとし、又た馬陵隄に觀城縣(今の觀縣)の東南十五里に在り、又五里濮州界に接すといひ、濮州東北三十里の説に虞喜の志林の馬陵は濮州鄆城縣東北六十里に在り、陵あり澗谷深峻にして伏を置くべしとの説をも掲げてゐる。ここに位置の考證は省いて、單に晉楚齊魏の兩遭遇戦は共に今の曹州の北の方向に當る處で戦はれたことは略ぼ正鵠を失つてゐないとして置く。前の場合には晉の上中下三軍と楚の二軍と陳蔡の軍とに當り、先づ陳蔡の雜軍を奔らせながら、木の枝(柴)を曳いて逃げ、その塵烟を望んで全軍が逃げると思つて之を追撃した楚の軍の側面を衝いて之を敗つたといふ。此の土烟を揚げたのは黄土の戦闘

を想せるに十分である。齊魏の戦に孫臏が龐涓の行程を度り、暮に馬陵るべく、馬陵の道狭くして旁に阻隘多く、兵を伏すべしとし、大樹を斫つて白くして、之に書して龐涓此の樹の下に死せんといひ、齊軍の善く射るものをして萬弩を道を夾んで伏せしめ、暮に火の舉るを見たらば、俱に發せよと命じ、龐涓が果して夜斫つた木の下に来て、白書を見て、火を鑽つて之を燭らして讀み畢らぬ間に齊軍の萬弩俱發して魏軍が大混亂を起して逃げ迷ひ、龐涓は自殺したといふ。此の場合は勿論、前の戦に晉の左翼の下軍が陳楚軍を奔らせて中央の楚の左師が突撃した時に晉の中軍が之を側面から撃ち、左翼の上軍も楚の右翼の大將子西(臣得)の本陣を突いたといふのも、此の黄土の地形を利用した伏兵の様な策略を用ゐたと想はれる。

兎に角大平野中央部に於いても、道路が多少の隘路を成し、車馬の交通により塵が起り常に風の浸蝕作用が起る特色が認められる譯で、信長が桶狭間のバッドランドの地形を利用して今川義元に奇襲を試みて、一撃の下に之を殲したのと、異曲同工の戦術が黄土地形の處で屢々力を奏するのである。

四

赭土の毒々しく赤い色彩は黄土よりも一層目に立つが、これは後者の如く高低に無關係に被覆するものでなく、主として水的作用によつて一定の水準に限られて堆積してゐるから、分布の範圍は

地形の凹凸に従ひ、低い部分だけに出てゐる。中生代の末葉に四川盆地に堆積して赤色盆地を形成するものはこの岩層の前驅者と看做してもよく、その下部を占める礫岩層が盆地の北邊の山地に接近すれば、深い谿谷と急峻な絶壁を成し、劍閣又は劍門の險要の場所として有名である。

宜昌以東の下流に露出するものにも、赭色砂岩及び頁岩層として區別された第三紀新期に屬すべく想はれるものと、單に赤い表土の如きものとがあるらしい。漢江と丹江の合流點以下襄陽の平地の兩岸には高い崖がこの種類の堆積物で、本流では岳州の西の嘉魚縣の赤壁が三國鼎立の形勢を決定する曹操對孫權劉備の爭覇戰の戰場であるし、更に下流には、黃州の赤壁があつて、蘇東坡の文章によつて却つて本家本もとの赤壁よりも有名となつた。後赤壁の賦に黃州から黃岡を経て揚子江對岸の赤壁に行つたのとあるが、兩地に黃の字を冠するも實は何れも紅の字に改めた方が地方色を表現して面白いらしい。

赭土は前に述べた如く日射の強い低緯度地方の特色で、それは過酸化鐵 Fe_2O_3 が出来るからで、湿度がまた高いもの之に與つてゐるといふ。熱帶地方の Laterite にも種々の成因説があるが、少くも水分の少いことは之に影響せぬらしい。日本内地でも之に類似の赤土が九州北部や山陰地方などの表土の上層に現はれるのが、これも強い日射と高い湿度とに關係があるかの如く見える。

黃土の道路が泥濘を生ずることは勿論であるが、江南赭土の地方に於いても、秋季以後になつて

雨後の道路が軍の行動を妨げつゝ、あるとの報告が戦局の發展につれて、屢々見えてゐる。故に必しも赭土の地方に泥が出来ないのではないが、南京附近から東の揚子江南岸は淮陰山脈が東に陵夷して、北風を十分に遮断しないから、幾らか黃土を吹き付けるので、その表土に之を雜へてゐる譯であらうと考へられる。現にローチー *Louchy* などは南京邊に黃土が被覆してゐる様にすら考へてゐる。しかし北方の深い溝になつた道路の泥の深いことは、私共が馬車旅行の時に經驗した如き、馬夫が高梁を折つて泥の深さを測つてから馬車を操縦する様には至らないだらうと想はれる。

五

支那では北嶺南嶺、南船北馬、北道南佛といふ様に南北の對照が色々の場合に高調され、その何れもは決して全く正鵠を失つてゐないのである。しかし我々が地理上の考察に當つて、之を鵜呑みに早合點して、それから演繹したり推斷しては飛んだ間違を生ずる。

北嶺と對立した南嶺を概念的に想定し難いのはその例である。今の粵漢鐵道の縱斷する分水界は所謂南嶺であるが、これは決して所謂北嶺が高い分水嶺の東西に連亘する秦嶺であるが如き地形上の分界ではなく、山嶽の走向が一定の方向に一致しない。秦漢時代から五嶺の一つを越して西江流域に達するので、廣東・廣西地方を嶺南と呼んだ。その分水界は頗る屈折が多く、雲南貴州の石灰

岩の高原と湘江以東の支那山系の北東南西の走向を有する山嶽の間に、之を横断する断裂地帯が南北に走つて出来た分水界に外ならぬのである。二つとも明瞭な東西に走る山脈で、相對立する如く考へてはならぬのである。

北道南佛といふ宗教の分布を標示する言葉なるも、これも嚴密な意味はなく、道觀は北方に多いかも知れぬが、佛教が漢代に先づ西域から洛陽長安に來り、六朝に降つて南の六朝に盛んになつたが、北魏北齊等にも盛んで、五臺山は支那で最も古くから今日に續いてゐる古刹である。

それよりも更に注意すべきは陝西・甘肅兩省の回教の盛んなことで、熱烈な信心が屢々内亂の原因となつた。日本が防共問題に國運を賭して戦ふに當つて、西藏と外蒙古の喇嘛教の行はれる地方に楔狀に介在する回教分布の關係を考慮して、その人心を收攬すれば、初めて國策の遂行が容易となるべきと信ずる。

交通の特色を表徴する南船北馬といふ標語に就いても、楯の一面だけを見てはならないのである。此の言葉は大體正しい認識であつて、兩種の交通機關の分布は秦嶺から桐栢山に引いた西北、東南の一線を分界線と考へてよいかと思ふ。京漢鐵道が敷設される以前に漢口から北に行く旅客は此の二つを使ひ分けねばならなんだ。大谷光瑞前法主が此の方向に旅行された時に、北方から漢口に來た西洋宣教師の馬車を譲り受けた話を聞いてゐるが、その面白い例である。漢江上流の老家口が河

船の集る一都會であつて、秦嶺藍田關に通ずる交通線上に榮えてゐるのも、此の關係を示すものとして頗る面白い。

揚子江以南の河流が交通の大小の動脈を成すことは申すまでもなく、その運搬力の大なるのが、高温で濕潤な氣候に恵まれた農産物その他の貨物の集散を容易にし、秦漢帝國が本部の南半を支配してから、次第に富の分配の南方移動を生じ始め、最近に至り終に北支那の諸軍閥を壓服して、廣東から起つた民國政府が、殆んど天下一統の實を擧げんとするに至つた。

此の南船即ち南方の船便を示す實景は楓橋である。今回蘇州占領によつて、この名勝地の寫眞が頻りに新聞紙上に掲げられてゐる、あのアーチ形の高い橋は民船の運河通行が出来る様に造つたのもで、それが我々日本人の目に珍らしく感ぜられるのである。内地でも琵琶湖沿岸の如き水郷の風景として決して絶無でなく、彦根近傍の伊庭村などでは村内の道路は石段を登つて橋を渡る、丁度以前京都の高瀬川に架けた小橋と同じ様で、又たイタリヤのヴェネチヤのカナレ及びカナレットに架けたものと似通つてゐるが、中南支河運の航路の廣いのは比較にならない。

戰爭に對して此の船便が非常に重要な役割を演ずることは我が海軍が砲艦を南支那の警備に用ゐるので明かである。その利用はゴルドン將軍が上海道臺李鴻章に雇はれて、長髮賊の戦亂を掃蕩するに有效であつた頃から既に認められるのである。

茲に我々の注意を要するのは南船の意義を餘りに重大視して、北方には船便は全く無視してよいと考へてならぬことである。北方に於ける河流と雖も、随分廣く利用されてゐるのは北京への米の供給に大運河が開かれてゐた事實だけで何人も知つてゐるが、その他の河流の利用に關しては餘り注意が拂はれてゐないらしい。然るにその利用は遠く春秋時代の末まで溯り得るのである。吳王夫差が覇を中原に稱せんとして、開封府の近傍の黃池で諸侯を會したが、この時に既に蘇州(吳縣)から揚帝の御河に並走する黃河派流の一を利用して、相當の兵力を用ひ得る船便を持つてゐた結果、その實行を容易ならしめたと考へられる。

降つて後漢末に曹操が河北に兵を進める時には今の衛河運河に並走する漕運の水路を開き、更に降つて隋の煬帝の高麗征伐にも河北地方の河運を開いて、出師の盛なること未だ曾て有らずといふ八十萬の大兵の運輸を助けた。

今回の北支に於ける作戰に在つても、京漢津浦兩線の間を進んだ我が一大部隊は南西から北東に流れる子牙河を溯つて、民船を大に利用してゐる。今年には水量が多かつたらしいから、特に役立つたのかも知れぬが、北方の陸運にも河流が決して無視出来ない實例である。

淮河に於いても周家口が河運の上端に當る要點であるから附近諸縣より人口が多く、それが敵の空軍根據地の一ともなつて、敵の軍資も此處に集められてゐた。

六

前回の上海事變以來クリークといふ名稱が戦場の地形上の用語となつて來た。常にクリークとは何かと聞かれる。誰もこの質問に悩まされると察する。

クリークは Creek と綴り、アイスランド語で Kriki (Eng. hook) と同語源で、もとは河口の邊の小さい入江に使用され、アメリカ・オーストラリア兩地で狭く長い小河で、潮汐によつて溯航し得るので、大に役立つものを呼ぶ。之を溯る探検者は上流まで用ゐるので、網目の様な今の上海の黃浦江派流にもこの名稱が使はれたものと見える。

語源は此の通りで終に上海附近の地形上の名稱になつたものであるが、此處のクリークなるものは全く特殊な小河の系統であつて、互に直角に交叉又は分岐して、方格狀になつてゐる。この排列は自然に生じた地形ではなく、田制及び聚落發生に伴つたものである。

上海でクリークといふのは蘇州河 Soochow Creek の如き自然の河道もあるが、吳淞クリーク、酒塘クリーク等の如き人工を加へたものもあることは、宋史河渠志六に崇寧二年吳淞江を開濬したといひ、大觀元年に吳淞江を開き、繼いで八浦を濬したので、その排水により良田を得たといふので明かである。顧炎武の天下郡國利病書(原論第一册)を讀むに、此の人工を加へた大小の水系に就いて述

べて、崑山(俗別身と號す)の東の太倉に西淞江に通じ、北常熟に通ずる一つの塘があつて、之を横瀝といひ、二里又は三里に小塘があつて、東西に流れるのを門といひ、壩身の東には其の田に丘畝の經界溝洫の跡があるといひ、崑山の南の夏駕、小虞等の浦があるのは水を淞江に決した道で、濶きは二十餘丈、狭きは十餘丈あつて、横塘がその中を貫いてゐる。是れは古代に縱浦を作つて江に通じ、横塘を作つてその水勢を分つたものだといふ。

又た浦の濶いものを狭めて田と爲し、又た舟を行き、舟を着ける便を利として、堤を決して涇を作り、崑山の諸浦の間には半里、一里、又は二里位に小涇を作り、之を名けて某家涇、某家濱といふ云々とある。

顧炎武は崑山の人であるから、此の附近の地理に通じて、此の如く治水を論ずるに、頗る自信もあつたらう。これで江南の大小の地圖に現はれる地名及び大小の水路の名稱の意味が明かとなるのが有益であらうと信ずる。

七

七月以來日々のラヂオ及び新聞に報道される戦争進行に注意される間に諸君は南北兩戦線に色々な地名が出るのに氣付かれた筈である。北京・天津・南京・上海・蘇州・杭州の如き耳に慣れたも

の、外に、大きな地名でも時々は分りにくいがある。それには人名地名共に異名別稱が幾つもある。場合によつて全く別の地名の如きものが用ひられるからで、随分面倒に出来てゐる。

私が初めて滿洲に行つた時に支那人の旅客に何處へ行くのかと問ひ、瀋陽シエンヤンに行くとの答にマゴつた。瀋陽は奉天の明代の縣名で、清朝に降つて用ゐられ、明代の南京は清朝の江寧となつたが、日本では支那人を南京さんと呼び來つてゐた如く、瀋陽驛と呼ばれる停車場も出来た。民國になつて京奉線が北寧(北京と遼寧)線と呼ばれ、又た上海(滬)と江寧を略して滬寧線と呼ぶなども頗る混雜した用語である。

此の種類の地名の異稱が混雜誤解を起し易いから、支那では昔から之に注意した。漢書地理志を班固が後漢になつてから作る時に、王莽が改めた郡縣名を注記した。爾來革命易姓の頻繁に行はれると共に、郡國州縣の變改が非常に多く、之を知らせる必要から正史の地理志、郡國志その他の地理書が出来たのである。

これは西洋の歴史地理といへば、所謂古代地理學と稱するもの、如くギリシヤ・ローマの地名が今の何處かといふのを示すに在るとの趣を一にしてゐる。是は地名學 Toponymy (Geographische Namenkunde) と呼ぶべきものである。

今回の戦争に當り、北支那では正定府よりもその西南の石家莊が重要地點となつて來たので、何

人にも注意された。又た南支那では上海附近に何々家宅といふ名が毎日報道されて、五萬分一又は二萬五千分一の詳圖に當つて見て、同名が多數あるので、何處の某家宅かを知ることが出来ないのに苦むのである。

此の二つの名稱は聚落と關係したものとすることは容易に氣付くのである。北支那では某家莊といふ地名が非常に多く、莊宅式聚落を示し、南支那の某家宅も之に類するものたるは直ちに推知されるが、その形式は一種特有のものである。

フランスのジュール・シオン氏の佛文世界地誌第九卷上冊には次の如き崇明島の居住状態を示す平面圖を載せてゐる。此の細長い宅地の區劃は耕作と關係して行はれたものである。私は支那歴史地理研究續集に「阡陌と井田」といふ一篇を収録して置いた。周代に北支那で行はれた田制は孟子の理想案で實行の疑はしい「井田」の法とは異つて、一單位の耕地と住居を含む面積は細長く區劃され、周人は十一の税、徹を徵集したと孟子のいふのが地割とも一致したもので、方格狀の井田なる區分法でなかつたと考へた。

抑周の諸侯を封建したといふのは、新に占領した土地に植民したものである。即ちローマがコローニアを設けセンチリオンといふ一隊の兵數に應ずる屯田を開いたのと司馬法の兵車を單位とした十夫百夫等の屯田兵を養ふのと趣を同くしてゐると考へるが妥當で、従つて土地を開くに先づ東西

南北の十字路を定めて之に長方形の區劃の地割をしたローマ人の田制そのまゝが行はれたとすべきである。阡陌といふのはこの十字路とすべきで、之に數字千百の附けたのはローマ人のデカマヌス(十夫)の如き名稱と共通なのも面白い。

要するに恐らくはカルデアその他の上古民族に行はれた地割がギリシヤからローマに傳はり、又た殷人の東方に進出する頃に東方にも行はれて、周代に及んだと考へるべきであらう。

此の狭長な耕地は馬耕牛耕に最も經濟的で、従つて江南の水田を開墾する時にも同じ區劃法が採用されたと考へてよい。私はクリーク戦から逆に聚落の問題に入つて、前に考證を試みて到達した古代田制が、今尙ほ江南新田の開発にも行はれてゐるのを知つて愉快に堪へなんだ。

上海附近が日本軍の進出するに當つて、崇明島の場合に似た數十米ごとに一の堀があり、數百米に更に大きな堀がある人工上の障礙物に出遇つた譯である。今や此の地方から、古く開けた内地に出たから、破竹の勢を以つて進行しつゝある。敵の戦意の喪失と我が士氣の倍振ふのと反比例するのは勿論だが、此の地理上の影響が與つてゐるかと思ふ。

以上述べたのは戦場となつてから急に我々の興味を惹いた二三の事實で、地理學上に面白い色々な問題に光明を與へるものがある。

餘談として申したいのは戦略地理上から見た戦争の考察は、戦場が敵對する兩軍に如何なる影響

があるかを問題とし、甲に利で乙に不利であるか、その逆かといふことを判断する譯だが、その當否は人的要因によつて變化する。日本が外敵に當る場合にこの要因が殆んどあらゆる他の條件に對して優越である。蒙古襲來の弘安役でも、朝鮮征伐の碧蹄館の戦でも、日露戦役でも、皆な然りて、従つて戦争の勝敗を豫想する必要は全然なく、進行の遲速如何以外にその關係はないといつてよい。従つて此の條件が我に有利ならば所謂破竹の勢である。その地形又は兵力の關係が不利なる場合でも、たとへば優越な敵の守勢を持する如きものに對しても、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず抜くのが、我が日本軍の誇りとする所で、孫子の兵法に十なれば之を圍み、五なれば之を攻めるといふも、日露戦役の奉天戦でも、今回屢次の戦争では常に衆寡如何を問はず、包圍と攻撃とによつて勝を決してゐるのはその明證である。

韓信が趙を攻めた時に先づ一萬ほどの兵をして水を渡つて背水の陣を布かせたといふが、今回の民國軍が督戦隊を置いて背後から鞭撻し、死力を出して戦はせる方法も之と同じことで、味方の同志討が起るのは避けられない譯である。一戦ごとに大小部隊を補充するに、豫後備の精兵がなく、苦力を狩り集めて來る様なことが多いのだから、次第に戦闘能力が低下して行くことは想像に餘りある。西洋人等に支那軍隊の價値を過大に見積られ、之を使喚して日本に對して開戦せしめたのだから、實に殘忍冷酷な遣り方で、支那民衆こそ憐むべきである。

三、北支那大平野の諸戰場とその地名の意義及び讀み方

一

北支事變の突發以來十箇月間の戦争の經過に伴ひ戦局は次第に擴大しつゝあつて、我が飛行機の活躍する範圍も亦た支那本部を被ひ、若し蔣政權の中心が雲南地方に移動することにもならば、その全部を包むことになる。又たその海岸は黄河と揚子江との間は勿論、浙閩粵の要津が大抵封鎖されて、諸外國國旗の船舶が軍資を輸入する以外は殆んど全く交通の杜絶を見た。

然れども最も花々敷いのは陸上戦局の擴大で、文字通り向ふ所敵なき皇師の進展は河北四省について、河南・山東・江蘇・安徽・浙江の五省に及び、今や旭旗は大平野の大部分に翻るの盛況を呈することゝなつた。北京西南郊の盧溝橋（蘆とも書くが清一統志に艸冠のない）畔に於ける民國第二十九路軍の我が駐屯軍演習部隊に加へた發砲が導火線となつて、我が堅持した不擴大方針を裏切つた狂暴な蔣軍閥の盲動により、終に國民政府の力で如何ともし難い收拾すべからざる禍亂になつ

たのは、顧みて感奮憤慨に堪へないのである。

今や不心得の軍閥を懲らして四億の國民を塗炭の苦から救ひ、永久の東亞平和の礎を定めんとする我が國民の義憤が連戦連捷の顯功となり、究竟の成果を收める日の遠からざるべき確信が上下に横溢しつゝある次第である。然れども排日抗日の教育が約二十年に亘り、頑民の數は決して寡少でなく、その徹底した覺醒を見るまでには相當の時日を要するは勿論で、従つて産業の統制と物資の節約とにより飽くまで長期の戦争を覺悟して之に臨まねばならぬのは言ふまでもない。屢々耳にする民國財政が何時破産するかといふ如きは暫く問題とせず、自ら恃むべき自力によつて如何なる難局をも突破すると決心を固めることが、第一義であると信ずる。

東亞戰雲のなほ漲らなんだ時に、我々は獨逸が包圍政策 *Einkreisungspolitik* の網に罹つた世界大戦争の當時を想ひ、此の如き惡辣な手段は日本に對しては所期の目的を達し得まいと考へた。當時獨逸國民の最も苦んだのは軍資よりも國民全體の食料の缺乏であつて、戦争をたか／＼一年位と見越したものが、牛豚を屠つて罐詰めた後の肉類の缺乏と小麥の輸入杜絶が特に著しかつたと聞く。獨逸が英國に對して潛航艇の海岸封鎖を宣言したのは英國をも同じ状態に陥れんとする報復策であつて、兩國共に苦んだ譯である。

蔣政權の繰返してある長期抗戦が今後一兩年續けば、食料の需給關係がどう變化するかを考ふる

に、日本軍が安徽省南部、江西・湖南の諸地方を占領すれば、米の輸入を仰ぐ廣東その他の南支地方への供給が絶えるので、住民の困憊を來すことは想像に難くない。若し之を安南・緬甸等の隣國から輸入するにせよ、數億元の輸入となるから、國內の物資移出入と異つた經濟上變態の狀態が起り得るのである。蔣政權の現に持つ資源は勢力圏の縮小と共に激減するから、如何なる遣り繰りをして、財政上の破綻が餘り永くない將來に起らざるを得ない。又た後援者たる某々國と雖も、日本の勢力が伸びると共に、その援助の下に新政權の範圍が擴大すれば、これ等の諸國の商權が次第に縮小するは火を賭るが如くであるから、どの位まで使喚して闘はせるのが利益か疑はしくなるのが當然である。事變の前途の逆睹し難いのは此等諸國の盲目的使喚の繼續如何にもよるが、雲南の一角に雪隠詰めになるまで續けるとも想はれない。然れども我々はその場合をも推定して、鑛物資源の多い貴州・雲南等の奥地まで進入する必要があると腰をすゑてよいかも知れぬ。

之を要するに獨逸皇帝が速戰速和を利とする大局の見透しを缺き、特に英國の参加を無視し、戦捷に酔ふた結果、マルヌ戦線の膠着後に至るまで、媾和の好機を握み能はなんだのが、覆滅に瀕する事態を招いたのである。東亞の狀態は之と全く趣を異にし、事變の根柢に横る問題の徹底した解決を必要とするのであるから、我が上下一致の努力には別の意味が含まれてゐるのを見通がしてはならぬと信ずる。

二

北支中支の間に展開する大平野がその二等邊三角形の隅角が重要な地位を占め、そこに發生した戦亂が大事件となることは、明治四十四年（宣統三年）に武漢に起つた革命の時に注意して「太陽」誌上に公にしたことがあつた。盧溝橋事件が他の隅角に起つたのであるから、その重大性は考へられぬではなかつた。然し我が對支方針から見れば、その際限なく全支那に擴大する筈はないとされた。最近洩れ聞く所では、禍機は頗る根強いもので、共產黨の差金で蔣中正（介石は字）が西安で幽閉された前後に、赤化の魔手は既に第二十九路軍の將校の間に深く浸潤してゐた事實があつたといふから、我々日本人には逆も想像だに出來ない氣分が一般であつたことが明かであつた。故に第一に上つた火の手が燎原の勢が全支を蔽ふのは避けられなかつた。

従つて事變直後から幾週間かの経過に内地で臆測する所には餘程齟齬する事情があつたのは蓋し當然で、通州事件の如き悲しむべきことや、南口の險要に對する壯烈なる肉弾戰の避けられななどはこれ等の頑迷なる支那軍人を相手として起つたのであると知れた今日、倍々臍を固めて對處する決心が必要となつた。

爾來北支に於ける我が軍事行動の進展を観るに、敵の作戰線は京漢鐵道を追手とし、津浦鐵道を

搦手とする北上軍に、更に西北から察・綏・山西諸省を聯ねた平（京）綏鐵道に沿ふた東進軍を加へた三軍が三道から分進して京津地方に殺到し來つたのである。大平野の西北上軍に對しては、七月中に我が北支派遣軍の到着するや、直ちに京津間の鐵道線附近に充滿する敵軍を掃蕩し、月末天津を襲撃した敵大部隊に痛打を加へて、兩市間の交通が先づ確保された。

九月に入り京漢線では良郷に前進して堅固な陣地を構へた敵軍を一蹴し、中旬には滄州を陥れ、二十四日保定府に達したこの南進と並行して、津浦線では十一日馬廠を陥れ、保定・高陽・任邱・大城を経て馬廠に至る交通路の兩端が先づ我が手に歸し、更に南進して二十四日滄州に達し、更に省界を越えて十月三日線上の要地德州に入り、八日正定府を陥れ、ついで石家莊を占領した。この東西兩線の相呼應して收めた成功で、大平野三角形の頂角に於ける滄石線の地區は全く確保された譯であるから、戰略地理學上から觀れば、河北地域の第一期作戰は完了したと見てよい。

此等の戰鬪の進行に當り、我々の注意を惹いたのは、東西兩線上の作戰に及ぼした地形の相異である。唐官屯・馬廠の諸戰場では、黄河の左岸を北東走する諸派流の存在が、昨年夏秋の大霖雨により河水の氾濫頗る甚だしく、九月二十日機上から滄州を偵察した報告に、町は宛も浮城の様だといふのであつたから、泥濘の道路や沼澤となつた平野を行進する困難は想像外であつたらうと想像された。之に加ふるに支那軍の故らに堤防を決潰して我が軍の行進を妨害せんとしたことも、大に

與つてゐた筈である。然れども一面には増水した子牙河の水運を利用して、兩線の中間地區に比較的迅速な行動が出来たし、敵軍の兩線間を連結した防禦線を張るのを沮害した事になつたらうから、一利一害の影響を受けたとも言ひ得ると思ふ。

此の氣候の戦争に及ぼした影響の内容は他日戦史が出るまで之を詳にし難いのは遺憾であるが、現状に於ては已むを得ない。

大行山脈東麓の黄土地方を走る京漢線に沿うた戦闘は之と趣を異にし溝道が黄土丘阜を截つた地形の錯雜が特殊の困難を呈するのは勿論で、また雨後に深い泥を生じて、溝道内の砲車・戦車等の通行に多大の妨害となつたことも想像されるのである。

三

山西省は大平野と全く地勢を異にし、全省の高度が大で、その東邊及び北邊に山嶽が連り、且つ厚い黄土に被はれてゐるから、作戦は守勢に利あるは勿論である。北岳恒山から西に延びた長城の壘壁ある山脈には有名な雁門關があり、東邊に太行山脈の障壁が連互し、北端に居庸關・八達嶺のある軍都陘があり、中程に正太線の通過する娘子關のある井陘があつて、所謂太行八陘險要の一となつてゐる。

前者は京綏線即ち北京から張家口・大同府・歸化城を経て包頭に至る察哈爾・綏遠兩省の交通線の大平野に於ける出口で、南口鎮がその咽喉となつてゐる。日本軍は八月中旬激戦の後に之を陥れて、破竹の勢で張家口・大同を攻略して、十一月八日太原府に達した。

南口は軍都陘の南の出口を意味し、北京から明十三陵を遊覽した人の西に望む峨々たる山嶺であるから、その攻撃の困難は何人も想像する所であつたらうし、大同府から南進して太原府に向ふには、先づ雁門關の峻嶺を突破せねばならぬのも注意された筈である。然るに我が軍の巧妙なる用兵法により、之をも容易に通過し、代州以南の滹沱河上流の溪谷を南進するに及び、惇縣・忻口鎮・忻州を連ねる南北の一線で意外に頑強な山西軍の抵抗を経験した。

此の街道を旅行したリヒトホーフエンに従へば、厚い黄土が廣い溪谷凹地を埋めた地形で、深い溝の穿たれた高い斷崖が出来てゐる。南進する皇軍の遭遇した困難は想像に餘るものがあつたのは怪むに足らぬのである。

後者即ち正太線に沿ふて西進する日本軍の通過に困難なのは、井陘縣から平定州に達する間に設けられた娘子關の險隘である。

大行山脈の中部は之を大平野の正定府の邊から西望すれば、平頂の臺地が壁立し、朝夕の日光を承けて、或は董紅色に、或は紺青色に、氣象の變化する壯觀に打たれるが、そのスカイ・ラインが

城壁の女牆の如く連るのを見ては天設の障壁でもあるかの様に感ずるのである。此の石灰岩が骨格の大部分を成した高原状の山地に深く鑿つた谷道に辛うじて狭軌の鐵道一綫を通じてゐるのであるから、戦況の進展が氣遣はれた。我が鯉登部隊が十月十三日から二週間を費して、娘子關を破つたのには辛酸の筆舌に絶するものがあつた譯である。

十一月に入つても忻口鎮の攻略が手間取つたが、北と東からの挾撃によつて、之を奪取して八日太原に入り、山西省會の大都市が我が手に落ちたのである。

以上述べた所は河北地方の戦争の經過に就いて地理上から觀て、注意すべきものを簡単に擧げたに過ぎぬ。津浦線に沿ひ黄河を渡つて南進してから以後、即ち徐州包圍戰及び之に續く京漢線南段に及ぼす積りで筆を執つたが、敵軍の黄河堤防決潰の結果が如何に戦局に影響するか、目下我々には見透しがつかぬから、遺憾ながらその推移の定まるを待たねば稿を續けることは出来ない。

四

今回日本軍の大陸活動が日々報道される以前には、日常見聞する地名に六ヶしいものは割合に多くはなかつたが、最近に至り大陸到る處の大小の地名がラヂオ放送と新聞紙とで我々の耳目に觸れることゝなつた。その耳新しいのを耳にして容易に聞取りにくく、翌朝の新聞に注意して、初めて

その漢字が分り、之を地圖に當つて位置を知ることが絶えずある。

此等の場合にアナウンサーがいゝ加減に發音したり、植字工が似よつた文字を當てはめたりするので困ることもあるが、その根本には日本慣用の字でなく、之を百姓讀みにして飛んだ誤讀・誤植を起すのには無理ならぬものがある。約言すればこの困難は地名の文字に日本で行はれることの稀なのが屢々あつて、その發音の仕方一寸と推斷しかねる場合が頗る多いことに起因してゐるのである。

我々の支那内地旅行の際に經驗した所では、馬夫などに聞く地名がどんな字か判然せぬことが多い、又た通過前または後に字の書ける宿屋主人などに之を書かせて見ても、當て字・略字が多く、その略字は我々の使はぬものがある。今回の戦場で使用される地圖にしても、支那人の實測圖があつたとして、使用された略字には現場で發音を知るのに可なり困難が感せられたものがあつたらうと推測される。そんな譯であるから、現に進行中の戦局がまだ廣大となるものとすれば、地名の成立と文字發音とに對する理解があれば、この種の困難は幾分か緩和されると信ずる。

地名を此の見地から考察して見るとして、行政廳のある様な大きな都市とのその他の村落又は小部落が種々の地理上の關係で擴張されて都市となつたものと、純然たる農村との三者を區別してかかるのが必要である。

現在の府州縣の地名は秦漢帝國統治の時に創定されたものが頗る多く、その官衙の所在地が移動したり、その領域が分合されて、廢されたり再び興されたりして、變革變遷を経て來てゐる。故にある時代の歴史上の記載を正しく理解するには、その時の行政區劃を知つてかゝらねばならぬことになつて、歴代正史の編纂に當つて、大抵地理志又は郡國志といふ一篇を加へてゐるのである。吳國を滅して西晉天下一統の武勳を樹てた杜預が春秋經傳集解を著すに當つて、古代の會盟戰爭等のあつた地名の位置を當時の地理に當てるのに力を用ゐたのは、この意義を正しく認めただからである。

正史の地理志は班固の漢書に初めて載せられ、王莽の漢室を篡奪して國を新と稱した時に縣名の多數を變更したから、その後編述するに當つて、漢府州縣名の下に班氏自注の莽の更めた名を附載したのも、實用の目的に出たのである。

此の如く一時代に定めた地名が次の時代に廢棄されても、全く不用に歸したかといふに、必しもさうとは限らぬ。その一例を擧げるならば、明代の藩陽縣が清代の奉天となつても、土地の支那人は慣れた藩陽を用ゐ、日露戰爭の時にこの地名を聞いてマゴついた經驗がある。寛城子なども長春となつた後に前名が通用してゐたのであるから、今は新京となつた後でも、恐らくは全く廢棄されぬかと疑はれる。

中支の戰爭に當り民國で府を廢して縣としたので、開港場蘇州（吳縣）を除いた常州（武進）湖州（吳興）、揚州（江都）、廬州（合肥）等の括弧内の縣名と府名とが混用されて報道されたが、通用の廣い府名がないために不便を感じたのは他の例であつた。

府州縣名の中で山又は水にちなんだものは頗る多く、大抵は容易にその語源語義が推知される。二字の地名で下に陽又は陰のあるのは、山又は水の南北に在るべきで、洛陽・西安間の華陰は西岳華山の北に在り、洛陽は洛水の北にあるなどはその適例である。又津の字は渡河及び船舶の繁泊地に用ゐられ、天津・利津・延津などにその用例を見る。此の他臨の字を冠するのは水に臨む意味で、臨淮關の船着場や、臨潁縣の如きものがある。

然るに同じ潁水の北にある陳州淮陽縣に至つては、淮水本流と全く縁遠い北方に位し、一寸と何の意義か分らぬ。これは此の地に漢代の淮陽國が置かれた緣故で、隋唐の間に陳州となつた後、淮陽郡となつた結果である。唐安祿山の叛亂の時に張巡許遠の死守して、その西進を牽制した睢陽城は秦以來睢水の北に置いた處で、歸德府治たる今の商邱縣で、漢代吳楚七國の反する時、梁國の都となり、孝王の城守して之を喰ひ止めた要衝の地である。此の府界は淤黃河を隔て、山東省曹州府に隣り、清末黃河北遷まではその戰略的意義が認められ、近年隴海線の建設によりまた必争の要地となつた。睢陽の地名を考證するに當つて、顧みて覺えず感慨が興るのである。

大平野の聚落の多数は農家であつて、莊宅 Ho² が起原であるから、姓を冠したものが頗る多いことは直ちに了解される。その中にも支那人の姓で最も多数を占める王 Wang が地名となり、王家莊・王村等が到る處にある。然れどもその反對に稀な姓もあつて、今回戦争に著はれたものには第一の戦報に正しい文字の分らぬものがあつた。地名・人名の漢音を聞いてその文字を當てるのは困難であるから、兵馬倥傯の際には錯誤が起るのも當然で怪むに足らぬ。

私の支那旅行中に通譯が名刺を示さず私の姓名を紹介されるに當つて、小 Hsiao 川 Chuan^{ナホツン}と言つて、大小の小、山川の川だと説明して呉れて、初めて先方に理解された経験が屢々あつた。従つて支那語を學ぶものは手始めに必ず百家姓を誦誦せねばならぬことになつてゐる。

茲に六ヶ敷い百家姓で地名になつてゐる例を左に示して見る。「片假名は漢音ローマ字は北京音」

刁 tiao 冉 jan 沈 shen^(チンは沈没の時だけ) 祁 chi 邵 tai 姚 yao 扈 hu 詹 chan 郑 tan 樂 yo
廖 liao 繆 miao 薛 hsieh 聶 nieh 龐 pang 鄭 li 夔 kuei 單 shan

此の如き面倒な字と音とを擧げるならば數限りない。一見すれば難解の極と見えるが、熟考すれば、漢字の音の轉化の關係で起つたことが推定される。鄭の場合は左傳に鄭子といふ蕃族で魯の附

庸に屬したものの、國名であつて、譚子とも書かれ、譚は又談とも綴られて、何れも姓になつてゐる。又たその偏の炎の字音は jen chen chan tian tan といふ風に轉化し得るのであつて見れば、別に不可解でないことになる。簡單の時に tan で地名ではゼン支那音 shan となるものにも、同じ徑路の轉化が認められ、之にオホザト即ち邑の附いた鄆城は鹿邑の西南にあつて、タンと讀む。詹にもタンの古音のあつたことは臆の場合から推定される。

これ等と稍異つたのは沂といふ水名にちなんだ地名で、沂州 Ichou は斤 chin の如く H が響かないこれは江蘇省土音に見る所で、他の字にも屢々行はれる。泰山の東に在る水源地に沂山といふ山が、周の職方九州の青州の山鎮であるから、山東省南半を含む淮水以北の全地方にも、古代に此の如き發音が行はれたものらしくなる。

小部落名には村屯店等の意味の明かな普通名詞の外に、鎮集等の名稱があつて、鎮は縣城に次いで堅固な城壁を繞らした防備を有し、集は定日に市の立つ村落を呼んで區別するものである。即ち鎮といふのは概して縣城でない重要な市街地を成す處が多く、時としては山東省の周村鎮の如く、附近の縣治所在地よりも却つて大きな都市となつてゐるものすらある。

〔皇軍の廣東の東南岸上陸以後に至り、聚落の普通名詞に墟といふのが屢々用ゐられてゐるのが目を惹いた。此の字は嶺南では集と同義で、十二支子丑等の日に開く市場を意味し、唐宋時代には

中支北支にも行はれたと見えて、范石湖の詩に墟市と連ねて「墟市稍來集」といふ句があり、王摩詰に墟落と連ねて「斜陽照墟落」といふ句がある。]

地名は姓名と關係あるものが頗る多いことは前に述べた通りで、進行しつゝある日本軍の活動を知るにその文字の正しい読み方が望ましい。しかし地圖及びその索引に出る文字を一々字引に當つて見ても、記憶することは容易でない。之を自然に覚え込むには水滸傳に列記され、又たその本文に出て來る百八人の姓名を知るなどは百家姓を暗記するよりも樂であらうし、支那の風物人情が彷彿と想像される面白味もある。

此の考へ方を一歩進めて見ると、大陸に發展せんとする新國民の教育には、最近まで殆んど定説の如くなつてゐる漢字の制限又は極端な西洋崇拜家の主張たる漢字廢止論の如きは何れも僻論となり、支那人と提携して東亞を支配するに同文の特長を無視することの不利益となるは瞭然たるのである。

従つて國語漢文の教程に兩國民に共通な格言俚諺等を適宜に加へ、相互了解の基礎を固める助けとするなども考慮さるべき所と考へられる。

結 語

淮河以北の大平野南部に展開する十三、四年の戦争は徐州包圍戦から脱出した國民政府軍の手で黄河決潰の暴舉を敢てし、その爲めに一時戦局の進行に頓挫を來した。

隴海線に沿ひ西進した皇軍は六月六日河南省首府開封城を占領し、次いで鄭州の南方で京漢線を遮断した翌の十一日に、黄河鐵橋の東で堤防を破壊し、兩線交叉點に位した要衝鄭州驛は風前の殘燈の如き危機から救はれ、暫く餘命を繋ぐことゝなつた。之に伴ひ一直洛陽西安を指す黄河南岸に沿ふ隴海線上の戦鬪も中斷された。然れども江淮間の淮山系の南北に集中した皇軍の進攻は倍々猛烈を加へ、山系の西部(所謂大別山脈)の北麓に臨んだ防禦陣地を突破して十月十二日信陽を陥れ、江岸に沿ひ南進する陸海協同の攻撃は七月二十六日九江、九月六日廣濟、十月二十五日漢口と、順次要地を陥れ、中支作戦にはあまり影響はなかつた。

即ち結果から之を觀れば、河北、河南兩戦域の南半約三百軒に達する戦線から兵力を割いて主要目標たる武漢三鎮に集注する作戦を容易ならしめ、久しく他の主要目標となつてゐた廣東十月二十一日の入城と恰かも同時に、南中兩支心臟部を刮つたことになつた。即ち蔣軍主腦部の局部作戦に於いて

得た一時凌ぎの彌縫は更に重大なる破綻を招いたのみで、河南省民怨嗟の的となり、民心離叛を促進する不利を買つたものに外ならぬ。

此の河道の移動により生じた直接の結果は舊河道を渡る新鐵橋が容易に架設せられる利便である。現に京漢線の新郷驛から陽武を経て東南に之を横断して開封に通ずるものが敷設され、我が戦線上に南北に自由に行動する途が開かれ、作戦上に頗る重要な役割を演ずること、なつたと信せられ、政治上からも省首府開封ともと黄河を隔て、ゐた省北都の障礙が消滅して、纏まりが好くなつた利益も看取される。

更に之を地理上見地から言はしむれば、新河道は滎澤から分流する賈魯河の舊渠に流れ込んで、周家口で颍河を容れて東南流し、正陽關で淮河に合し、揚州を経て鎮江の對岸で揚子江に合すること、なつた。この新水路の成立は將來の支那に對して極めて重大なる交通上の意義を有し、河淮兩流域を含む大平野が完全なる一大地理的地域となり、政治、經濟、軍事等あらゆる關係が殆んど成立以前と以後に面目一變し、又たすべきである。支那の地理に關心を持つ我々は黄河の三千餘年間の變遷の東亞文化に及ぼした効果が縮圖となつて一度に眼前に現出した如く感ずるものである。若し新河道が殷周以前に成立してゐたならば、牧野の決戦も、首府として東土に君臨する重心としての洛陽の重要性も、或は失却したかも知れず、春秋戰國楚漢の諸決戦も亦た異つた地點で起つたかも知れぬ。

それよりも更に深省を要するは將來の支那政治上の中心が何處へ設けられるべきやの問題で、之に關聯する種々の事項を綜合すれば、過去及び現在に即した傳統的概念を一掃して、舊清朝版圖の全體が急速に開發される氣運の將來を洞察して決定されねばならぬと信ずる。而して我が興亞政策の遂行實現に包括さるゝ範圍は、既に開發の緒に就いた滿洲の外に回疆、外蒙、西藏を含み、その中央を占むる三角形に似たる大平野に於ける北京が交通、經濟、政治の重心であることは疑を容れない。

過去に於いて邊疆として從屬的地位に過ぎなかつた此等地域は各その特殊性が發揮される將來の見透しは、北米合衆國獨立當時の東部十三州より西に位するミシシッピー河の流域たる中部プレーリ(草地)農牧地帯、その西のロッキー山脈に續く高地の鑛山地帯、更にその西の太平洋に面する鑛山及び耕作地帯の順次開發の經過を參照すれば明々白白多言を要せぬのである。故に將來の中央地域と周邊地帯は黄河移動により纏りの好くなつた大平野地方とその接續地方との主從關係に従つて自から定まつて來る。若しこの關係を無視して、傳統的產業が中世以後に發達した中支南支の現状のみに捕はれた考へで、興亞政策の大方針を樹立せんとせば、姑息的消極的措置に陥り、百千年の長策を誤ることになり得る。

此の見地から更に一步を進めて見れば、現に進行中の河北、山東、山西の殘賊掃蕩作業は頗る意義があるもので、淮河線以北を先づ暴賊の手から救ひ、次に贛浙線以北一圓に我が皇化を光被するのは

長期抗戦を誇稱する蔣軍々閥に對する作戰の大方針の一として、時宜に適してゐる。彼等は皇軍は線と點とを占領しても、面でないとへらず口を利き、我が言論界も之を受け容れて、鸚鵡返しに點線面といふ幾何學概念を云爲してゐる様であるが、此の如き抽象的措辭は如何に巧妙でも、現實とは凡そ縁の遠いもので、重要據點を悉く占領され、交通線を奪はれた上は、その網の間に包まれて唯匪賊として餘喘を保つ外に大局に影響する所はない。我が掃蕩戰の趣旨は之に苦しむ住民の生活を安樂にして、宣撫の目的の徹底を期するまでである。

徐州戰の後日物語ともいふべき津浦線東に追ひ込まれた敗殘兵掃蕩戰の一齣に於いて曝露したのは第三國の袋を喰ひ破つてその内の鼠賊に軍資を貢いでゐた行動で、天津に於ける英佛兩租界封鎖を餘儀なくし、又た之に伴ひ對日包圍政策が倍々露骨になつて來たのに鑑み、我が國民は更に大きな國難が近き未來に續いて襲到する場合の絶無でないのを覺悟し、之に對處する決心を固めねばなるまい。

本篇以外に歴史地理學上から日本及び大陸の戰場を考察した論稿で、収録せぬもの尙ほ多きも、東亞戰局の更に進捗した後に、續篇として重ねて之を公にする積りである。

昭和十四年七月十一日印刷
昭和十四年七月十五日發行

戰學地理學研究
定價貳圓五拾錢

版 權 所 有



著 者 小 川 琢 治
發 行 者 橋 本 福 松
東京市神田區駿河臺三丁目十番地
印 刷 者 白 井 赫 太 郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

精興社印刷

發行所 東京市神田區駿河臺
貳丁目拾番地

古今書院
振替東京三五三四〇番

33.4.16

西村屋書店
東京・牛込

店吉堂京采

